

『クソ親父』【完結】

キ鈴木

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦争終結後、艦娘達はどのような日常へ戻るのか。

これは彼女達の言葉をおもい束ねた温かくも切ない戦後の物語。

※挿絵を東屋とりで様に描いていただきました。

目次

『クソ親父』	1
『ぷっぷくぷー』	14
『しれいかんにけいれい』	22
『やつと会えた』	34
『私は青空が好き。青空に高く高く昇る白い雲が好き』	46
『最後のお客さん』	57
『輸送作戦はお任せ下さい』	64

『クソ親父』

赤い、というよりは酸化してしまった血液の様な、どす黒い色をしていた海が嘘のように透き通り太陽の光を反射する。それと同時に目の前で隊列を組んでいた深海棲艦が悲痛な声を上げながら消えていった。

——ああ、終わったのね。

私達は勝ったんだ。きつと最前戦を任されている艦娘達が原初の深海棲艦を撃破したんだ。

「びっしょ」

私の艦装……曙艦装に宿った妖精さん達が私に敬礼をする。そっか、お別れなのね。

私が敬礼を返すと妖精さん達はやるべき事をやったような満足した顔で消えていった。その瞬間、妖精さんの加護を失った艦装は海面に浮く為に必要な浮力まで無くし私を海の中に放り出した。

ばっしやーん

海の中から海面を見上げる。太陽の光が屈折しオーロラのような美しさを作っていた。……オーロラなんて見たことないけどね。

そういえば戦争が終了したら私達はようになるのだろうか？ 曙艦装へ志願して孤児院を出たのが7歳の頃。孤児院……あそこは私には合わない……のではなく私があそこに合わなかった。捨かれてるからね。

そんな私だから普通の生活に戻れるのか少し不安だった。



戦後の艦娘の待遇はまあ、そんなものでしょうねといった感じだった。

既に社会性のある戦艦、空母達は新たな仕事の斡旋。本来ならまだ義務教育を受けている年齢の私たち駆逐艦や潜水艦は親の元へ……といったも戦争に志願する様な小学生には大体親がない。皆私と

似たような境遇なのだろう。そんな私達は養子に出される事になった。

「じゃあね曙ちゃん向こうに着いたら絶対に連絡しようだいね」

「分かったからさっさと行きなさいよ」

潮を見送る為に港に来ていた。一番高い位置に来た太陽はさんさんと私たちを照らしている。

?? 港には別れを告げる私と潮。それに潮を迎えに来た2人の夫婦が立っていた。

泣き出してしまいそうな潮を半ば強引に夫婦の車に押し込み見送る。潮はずっと車窓から身を乗り出し手を振っていた。

「よしっ」

潮に乗せた車が見えなくなると私は背中のリュックサックを背負い直す。

『私達が救った街を見てみたいから里親のところには自分の足でいくわ』

そう潮には嘘をついた。里親なんて見つかってない。私みたいのが誰かの養子になるなんて無理よ。孤児院にいた時と同じ様な結果になるのは目に見えてる。……捻くれてるからね。幸いにも軍からもらった給料はたんまりあるから何とでもなるでしょ。

「行きますか」

「おう」

「!？」

私の独り言に応答した方を見ると我が鎮守府の提督が私と同じ様にリュックサックを背負って立っていた。

「なにしてるのよクソ提督」

「何って、お前は俺を待っててくれたんだろ？」

「はあ？」

私 waited たのは潮よ！あの子最後のひとりになるまで鎮守府に残るなんて、大方私を見送ろうとしてたんでしょね。

「ああ？独り身の寂しい俺を気遣って、養子になってくれるんだと思ってたんだが違うのか？」

そう言つてニヤリと右側の口角を上げて笑う。こいつ……私の素直じゃない性格を理解して誘導してるわね、そんなのお見通しよ！……でも。

「そうよ！クソ提督が本土で野垂れ死なないよう私が面倒みてあげるわよ！」

私の性格を知つててなお私を迎えると言うこいつの所になら行つてあげてもいいかなつて……そう思った。



「なにこの家」

クソ提督のあまり趣味がいいとは思えないオレンジ色の軽四、本人は『ハスラー』つて言うんだ、キモかわいいだろ？』と言う車に揺られて着いた場所には家……というよりお店があつた。いや煙突とかついでるし。

「俺、妖精可視の素質が見つかるまではここで和菓子屋さんやってたんだよ。まつ、とりあえず入ろうぜ」

建物の中は家と店が一緒になつた様な木造の造りになっていた。7つほどの部屋がある一階建てでそのうちの入口を入つてすぐの一番大きな部屋が店となつているようだ。

永らく人がいなかったせいだろう、部屋の至るところにホコリがつもっていた。お掃除しないとね。

部屋の掃除が終わるとクソ提督はどこからともなくお菓子の材料を持つてきた。開業の準備をするらしい。

私はクソ提督がエプロンをつけてお煎餅を焼いたりどら焼きを作る様子を眺めていた。へーなかなか様になつてるわね。男の人のエプロンつてのもちよつといいかも、なんて思っていると

「ちよつとーなんで牛タンをどら焼きの中に入れてるの!？」

奇抜で面白いだろ？そんな応えをクソ提督は返した。

このクソ提督は……私達艦娘を指揮する時も相手の意表をついた奇策をよく立案していた。そして奇策を思いつくと決まって

ニヤリ

と今浮かべているこの表情をするのだ。

「どら焼きに牛タンは奇策じゃなくて蛮行だから……」

店の看板商品が欲しくてなーとニヘラと笑っていた。

□ ■ □

開店して数日がたったがどうやらこの店は余り繁盛していないみたいだ。今日のお客さんはたったの10人だったし。18時に店を閉めた後、クソ提督は晩御飯を作りこたつの上に料理を並べた。今晩はおうどんだ。二人でつるつるとおうどんをすすつっていると

年明けからお前学校な。とクソ提督は私に言った。

まあそうなるでしょうね。そう言われることを予測していたし、私は分かったわとだけ返事しておいた。

晩御飯を食べてクソ提督と二人で年末特番を見ていた。

それにしても学校かー、不安かもね。行ったことないし。そんな事を考えていると、

「？」

頭に何かが乗ったような感覚。クソ提督?と隣をみるとクソ提督は大人しくテレビを見ている。じゃあ頭の上のこれは?頭の上の物体Xを驚掴むと

「ぎゃっ」

そんな声をあげた。驚いて掴んだものを確認する。

——あの日消えた筈の妖精さんが私の手の中でもがいていた。

えっ?ちよっ?なんで!?!終戦以降全ての妖精さんは消えたはずじゃ。

クソ提督にも見せる。最初は驚いた顔を浮かべたがぽりぽりと頬を搔いて困ったような反応をする。なによその反応。

なんで妖精さんがいるのか分からないけどちゃんと面倒みるよ。

私が面倒みるの!?……まあ戦争中はお世話になったしそれくらい当然か。私が妖精さんを解放するとぱたぱたと飛び上がりまた私の頭の上に乗った。そこが定位置なのね。

次の日朝7時に起床して店に出るとクソ提督がうーんうーんとうなっていた。手元をみるとたい焼きの金型二つと沢山の材料が並べられている。それを見て私は、ピーンとアイデアが閃いた。

クソ提督をどかしてもっともらしい事を言ってみる。

「あのね、クソ提督は材料や味にしか思考がいつてないのよ。和菓子っていうのは見た目も重要なはずよ!というわけでよろしく妖精さん!」

妖精さんに指示をだす。妖精さんはビシッと敬礼をして2つあるたい焼きの金型の1つをカンカンとハンマーで叩く。3分ほどで「できましたー」

と私の元に金型を持ってきた。

これぞ私の考案したたい焼き(秋刀魚)よ!どうよこの形。可愛いでしょ!なんとたって秋刀魚だからね可愛いに決まってる。え?そんなに細いと餡子を入れるスペースがない?いいのよ!ヘルシーじゃない!

さつそく金型に材料を流し込みたい焼き(秋刀魚)を食べてみる。うーん……ヘルシーね!一瞬微妙な表情を浮かべた私を見て笑っていたクソ提督の脇腹に曙パンチをいれておいた。

18時、今日もあまりお客さんはこなかった。たい焼き(秋刀魚)も売れなかった。

クソ提督と妖精さんとこたつでテレビをみながら晩御飯を食べる。今晚は蒟蒻ハンバーグだ。私がヘルシーヘルシーと連呼するから余計な気を使ったのかも知れない。

あまり面白くなかったのでテレビのチャンネルを適当に変えているとニュース番組で手が止まる。

『原初の深海棲艦を倒した英雄の早すぎる死』

クソ提督の横顔を窺う、悲しんではいるようだがその表情はこうなる事が分かっていたのか驚いた様子はなかった。何か思うところがあるのだろうかと思った私は、チャンネルをそのままに妖精さんと共に自室に戻った。

□ ■ □

また数日がたった。最初は不安だった学校も通って見れば案外私のような捻くれ者でも受け入れてもらえた。友達もできた。

「クソ提督、明日は授業参観だけど来なくていいからね」

おう、とクソ提督は返事したけどきつと来るだろう。

授業参観にクソ提督はやっぱりきた。その日の給食は親と一緒に食べるようになっていた。友達とそのお母さんとクソ提督の4人で机を合わせる。

友達の前でまでクソ提督と呼ぶわけにもいかず「お父さん」と言ってみると驚くほど嬉しそうな顔をしていた。なんなのよ一体。

学校から帰って店の手伝いをする。クソ提督は外で遊んでこいつて言うけど私が好きでやってるんだから放っておいて欲しい。最近には私に会いに来てくれるお客さんも増えたんだから。

18時に店を閉めクソ提督と妖精さんとで炬燵に入り晩御飯を食べる。今晚はおでんだ。私は餅巾着、クソ提督は牛すじ、妖精さんはタマゴばかり食べていた。好きな具が被ってないから無駄な争いは起こらない。

食べ終わった後ぬぼーとニュースを見てみると

『呉の英雄の死』

という文字が流れた。またか……提督さん達死にすぎでしょ。ち

らりと見たクソ提督の頭髮に白がかかっていたのが気になるけど、まっうちのクソ提督はピンピンしてるし大丈夫でしょ。まだ20代なのに白髪なんて生やしてんじゃないわよ！



数年が経って私は17歳、高校3年になった。

今日も私とクソ提督はお店でお客さんを待っている。

あまりにも提督さん達が早死にするからクソ提督も……なんて思ったけど今も元気に奇抜なお菓子を作っている。この間なんてたい焼きの材料に粒餡を買ってきたら、たい焼きにはこし餡だろ！何ていうから大喧嘩した。粒餡の方が美味しいわよ！

18時に店を閉めて晩御飯を作る。今では私が作ってるんだから！クソ提督はめんどくさくなったとかでお店に出ている時以外は基本炬燵で寝ている。てかこの炬燵、年中出てるわね。

炬燵に料理を並べるとクソ提督が起き上がる。今晚は秋刀魚の塩焼きよ。

そういえば最近妖精さんがいない事があるのよね。どこ行ってるのかしら。

土曜日の朝、私はういーんという音を出しながら部屋に掃除機を掛ける。クソ提督は掃除機の騒音など気にも留めず炬燵で寝ている。よく眠れるわね。げしつと背中を蹴りクソ提督を起こす。

「もうすぐ潮が遊びに来るんだからね！しゃきつとしなさいよ！」

びんぽーん

来た！

ばたばたと慌てて玄関に駆け寄り扉を開ける。

久しぶりに会った潮はとっても大人びた魅力的な女の子になっていた。挨拶をする潮をみてクソ提督も驚いている。あつこら！胸ばっか見んな！

その日は一日潮と遊んだ。私のたい焼き（秋刀魚）を嬉しそうに食べてくれたわ！

日が暮れ始めた頃

ぱたぱたと私と潮の元に妖精さんがやってくる。こらっ、どこいったの！妖精さんに注意していると潮が驚いたというか驚愕した表情をしているのが目に入った。

「どうしたの？」

「曙ちゃん……その妖精さんいつから？」

「この子？私とクソ提督がこの家に来てすぐ現れたけど」

潮が息を呑むのが聞こえた。なんだって言うのよ。

「曙ちゃん、落ち着いて聞いてね」

ちよつと怖い顔をした潮は話しはじめる。

「提督、最近寝てる時間が多くなってない？」



妖精さん。その存在が一体なんなのか私達艦娘もよく知らなかった。いや、提督達しか知らない。潮の里親……父親は呉の提督だったらしい。そんな父が死の間際に潮に話した。

妖精とは提督の分身。自らの命を削って召喚される存在。

だから提督になる条件とは妖精が見えることではない。命を削って艦娘を守りたいと思う優しさがある事なのだ。

妖精の数と顕現させている時間によって提督の寿命は減っていく。だから最前線で戦っていた英雄ほど早死にしていた。きつと優しい彼らのことだ、妖精が何なのか艦娘が知れば涙を流すと考えた。だから誰もその本質を語ることはなかったのだろう。

肩にとまる妖精さんを見る。きつとクソ提督は私の事が心配だったのだろう。だから妖精さんを召喚して私を見守っていたんだ。

「潮……悪いんだけど」

「うん……私今日は帰るね」

潮を見送りクソ提督の元に走る。

まだ炬燵で寝ていた。

「起きなさい！クソ提督！」

んだよ、と頭を掻きながら起き上がる。私は妖精さんを掴む腕を突きつけて言う。

「聞いたわよ妖精さんの正体！あんた何考えてるのよ！」

あくばれちまったか。とバツが悪そうに言う。

「早く戻して!!早く!!!」

わかったわかったと言いながらクソ提督は妖精さんと呼ぶ。すると妖精さんは悲しそうな顔をした後、クソ提督の胸の中に消えていった。

「正直に答えなさい。嘘ついたら承知しないわよ」

はいはい。

「最近あんた寝てばかりだけど体が辛いんでしょ」

……そうだよ。

「何でそんなになるまで妖精さん出してたのよ」

……心配だったんだよ。

「もう寿命……残ってないんでしょ」

……まだ半年はあるよ。

「うわああああああああん」

泣き崩れるしかなかった。

「ばかっぱかっぱかっ」

私はもつとあんたとこの生活が続けられればそれで満足だったのに。なんであんたは……



それからは家の事は全部私がやった。休んでなさいって言うのに手伝おうとするから怒ったりもした。

そんなに過保護にならなくてもお前の卒業式には居てやるから安

心しろよ。何て言う。

ばか。

□ ■ □

卒業式の1ヶ月前、とうとうクソ提督は病院のベッドで一日のほとんどもを眠る様になってしまった。

卒業式の1週間前。お医者さんからもう持たないだろうと言われた。

嫌だよ。嫌だよ。卒業式までは生きてくれるって言ったじゃない。約束守ってよ。

クソ提督が目を開ける。何か言いたそうだがもう喋る事もできないようだ。辛そうな顔をしていたが急に

ニヤリ。

と、あの奇策を思いついた時の様に右側の口角を上げてわらった。なんなのよクソ提督、言いたい事があるならちゃんと言いなさいよ。声を聞かせなさいよ。あつ待って目を閉じないで。もつと一緒にいてよ。

その夜、クソ提督は息を引き取った。

□ ■ □

クソ提督の葬儀は滞りなく進んでいった。その様子を私は傍観していることしか出来なかった。

ただ、火葬された際に立ち上る煙が空に昇っていくのを見ていると段々とクソ提督が死んだという実感が湧いてきた。泣いた。

「ただいま」

もうお帰りと言ってくれるクソ提督はいない。和菓子の匂いもお煎餅を焼く音も聞こえない。私が廊下を歩く音だけ。

一人ぼっち。

□□□

卒業式はクソ提督との思い出を振り返っていたらいつの間にか終わっていた。式の後に同級生たちは写真を撮ったり御飯を食べに行ったりするようだ。私も誘われたけどとてもそんな気にはなれない。帰ろう。

「ただいま」

誰もいない家に帰る。……？あれ？たい焼きの匂いがする。

いるわけがないと分かっているのに店へと走る。案の定クソ提督はいない。そりやそうね。

クソ提督の匂いが染み付いた炬燵で寝ようと居間に入る。するとそこに

炬燵の上にお皿に載ったたい焼き（秋刀魚）と妖精さんがいた。

もう枯れきっていたはずの涙がボロボロと溢れてくる。目が涙で滲んで前がよく見えない。鼻がぐじゅぐじゅになって息がしづらい。

「クソ提督、なんで！なんで！」

妖精さんがニヤリとあの表情を浮かべる。

『そんなに過保護にならなくてもお前の卒業式には居てやるから安心しろよ』

あの時の言葉を思い出した。ばかつ、居ればいいってもものじゃないでしょ。きちんと生きてなさいよ……。でも私との約束を守ってくれたのだと思うとまた涙が溢れてくる。

妖精さんの身体が薄くなっていく。まって！まだ言いたい事が！

クソ提督と過ごした日々がフラッシュバックする。

この家に来た時。

どら焼き牛タンを止めたとき。

おうどん、おでん、秋刀魚の塩焼きと一緒に食べたとき。

私がたい焼き（秋刀魚）を作ったとき。

粒餡こし餡で喧嘩したとき。

授業参観の日に私がお父さんって呼んだら喜んでたとき。

そういえばあの時は珍しく素直に喜んでた。もう一度。だけど私がお父さんって言うのは違和感あるわね。だから……

「クソ……親父」

ニヤリと笑っていた妖精さんが驚いた後俯き、自分のズボンを握りしめている。足元にはポタポタと涙が落ちていた。

「クソ親父」

ごめんね。ずっとお父さんて呼んであげられなくて。

「クソ親父」

ごめんね。素直になれなくて。

「クソ親父」

私、あんたと一緒にこの家で暮らせて本当によかった。

「クソ親父こっち向いて」

クソ親父の体はもう首から上以外すべて消えてしまっていた。泣きじやくるその顔が残っているだけだ。やっぱり最後はわらってお別れしたい。

ニヤリ

私はあの表情を浮かべる。それを見たクソ親父も涙を流したまま

ニヤリ

あの表情を浮かべた。

「さようなら、クソ親父。ずっとずっと心配かけてごめんね。でももう大丈夫だから。ゆっくり休んで」

おう。そういつもの様に笑いながらクソ親父は消えていった。

炬燵の上にはたい焼き（秋刀魚）が残っている。大方私を驚かす為
に作っていたのだろう。

私は涙で滲んだ視界の中、ゆっくりとたい焼き（秋刀魚）を口に運
ぶ。

——こし餡じゃないの

もう一度、ニヤリと笑うクソ親父の顔が見えた気がした。

『ぷっぷくぷー』

この鎮守府には音がない。

提督である俺も総勢50名を超える艦娘達も全員、音を発する事ができない。誰かに向けられた言葉も、足音も、呼吸の音すらも揺るがない静寂の中に飲み込まれてしまう。

ただ一人の例外を除いて。

プツプクプ〜！！

今まで物音ひとつなかった鎮守府にラツパの音が響き渡る。

駆逐艦 卯月。彼女は音を無くしてしまったこの鎮守府で唯一音を発する事ができる。

ラツパの音を聞いた睦月や龍田達が慌ただしく音のした方へ走って行く。もちろん彼女達の足音は響かない。

今のラツパの音は卯月の犯行声明だ。イタズラが大好きな彼女はミッションを完了すると必ずおもちゃのラツパを鳴らす。『犯行内容をみんなに知らせる。それがプロフェッショナルとしての流儀ぴよん』とは本人の談だ。

だが、きつとそれは嘘なのだ。イタズラのラツパを鳴らせば彼女を窘める為に多くの艦娘がやってくる。本当はそれが目的なのだろう、彼女はどのようなもないほどに寂しがり屋なのだから。

それが分かっているから俺達は今日も卯月の元へ向かうのだ。

◆◆

「ぴよん…」

ラツパの音のした食堂に入る。中は至る所が赤いペンキで塗られたくられていた。おいおい、今回は随分派手にやったな……こりや雷が落ちるぞ。

辺りをぐるりと見渡すと中央で卯月が正座させられていた。卯月の前には般若の形相で仁王立ちする鳳翔、声が発せなくとも十分にその怒りが伝わってくる。

流石に艦隊の母には弱いようだ、少ししよぼんとした表情を浮かべ

ている。まったく、そんな顔をするならイタズラなんてしないでくれ。



夜、自室の窓から外を眺めていると扉からノックの音がした。音が鳴ったという事は扉の向こうにいるのは卯月だろう。

「しれえかん……一緒に寝ていい？」

俺と卯月の会話に言葉は必要ない。それだけの永い時間を共に過ごしてきた。

またか、仕方ない奴だな。

「びよん♪」

そう応えると卯月は満面の笑顔で俺のベッドに飛び込んだ。

やれやれ、と頭を掻きつつ俺もベッドに入る。布団の中は今入ったばかりとは思えないほどに卯月の体温で満たされていた。

ぽんぽんと卯月が寝付ける様にお腹を軽く叩いてやる。卯月はこれがお気に入りなのだ。

「ねえ、さっきまで何してたびよん？」

特に何も。ただ外を眺めていた。

「しれいかんいつつも外を見てるびよん。なんで？」

……人を待っているんだ。

「人？それって誰びよん？」

さあな、誰でもいいんだ。

「意味わかんないびよん」

いいんだよ分からなくて。さっさと寝ろ。

「はあーいびよん」



プップクプー！！

朝、鶏の鳴き声の代わりに鳴り響くラツパの音で目を覚ます。卯月

が寝ているはずの隣を見るがもちろんそこに彼女はいなかった。

急いで自室を出て音のした方へ向かうと資料室の前でまた卯月が正座させられていた。今回仁王立ちしているのは大淀だ。

何があつた？

卯月さんが資料室の鍵を隠してしまつたんです。

そう身振り手振りで伝える大淀はやはり般若の形相だ。なるほど、資料室は大淀にとっては聖地に等しい場所、その部屋の鍵を隠されたとなればこうなるのも無理はない。

卯月、鍵を返してやれ

「もう海に捨てちゃつたぴよん」

!!!!

おいおい、そりやイタズラにしちややり過ぎだぞ……大淀が怒りの余りガニ股でどつか行つちやつたじゃねえか。

「ぶっぶくぶ……」

まあやつちまつたもんはしよーがねえよ。ほら、飯食いに行くぞ。

◆◆

夜、今日も自室で外を眺めているとそろり、そろりと俺の背後に近づくと足音が聞こえる。

まったくバレバレなんだよ。この音のない鎮守府でお前が隠密行動なんざ取れるわけないだろうが。

だが驚かされてやるのも大人の務め、このまま外を眺めていよう。足音は少しずつ近づいて来て俺の真後ろで歩みを止めた。

「わっ!!」

！っ

「あはははー引つかかつたぴよん！びっくりしてるぴよん！」

驚いたじゃないか。

「あはははーだつせえーぴよん！」

……悪い子とはもう一緒に寝ないからな。

「あつ……ごめんなさいぴよん……」

たくつ、ちゃんと反省しろよ？ほら寝るぞ。

「ぴよん」

いつもの様に卯月とベッドに入りぽんぽんとお腹を叩いてやる。
大淀とは仲直りできたのか？

「……まだぴよん。うーちゃんの事無視してるぴよん」

あー、大淀にとつて資料室は特別だからな。怒るのも仕方ないさ。

「大淀はもううーちゃんの事嫌いになつたぴよん？」

いいや、それはないな。なんだかんだ大淀はお前の事が好きだからな、もちろん俺も他の艦娘も。

「……」

明日もう一度謝ってみろ。きつと許してもらえさ。

「ぴよん……」

悲しそうな声で返事をする卯月。きつと彼女の中ではある葛藤があるのだろう。

……卯月、鍵を捨てたなんて嘘なんだろ？本当は今もお前のポケットに入ってる。違うか？

「……なんで知ってるぴよん？」

わかるさ、俺とお前の仲だ。そんなことより、もし大淀に悪いと思ってるなら資料室の鍵を開けてやれ、それで解決だ。

「……それはできないぴよん」

だろうな、お前のイタズラには理由があるもんな。本当にどうしようもなく不器用なやつだ。

「きれいかんは今日も外を見ていたぴよん？」

ああ。

「待つてる人は来た？」

いいや、まだだ。

「そっかー。早く来るといいぴよんね」

まったくだ。



雪の降る日の夕方、俺はいつもの様に執務室から外を眺めていた。外ではふわりふわりとたんぽぽの綿毛のような淡い雪が空からゆっ

くりと舞い落ちていた。

卯月が雪だるまを作って遊んでいる。静か過ぎるこの鎮守府では卯月の足音がこの執務室まで届いてくる。俺は目を瞑り卯月の奏でる音に集中する。彼女が一步、また一步と歩くたびにムギユ、ムギユと雪を踏みしめる音が何かの楽器なのではと錯覚する程に心地良く感じた。

何時までもこの音を聞いていたい。待ち人なんて永遠に来なければいいのに。そんな自分勝手な事を考えてしまった。

「うーっさっむいぴょん」

鎮守府の中に戻るやいなやマフラーと手袋を脱ぎ捨て暖炉の前にしゃがみ込む卯月。長時間雪遊びをしていたからだろう耳や鼻が赤くなってしまう。

パチパチと音を立てながら燃える暖炉だけが卯月を助ける事ができる。今の俺は何もできないのだ。本当に何も。

俺が無力になり、この鎮守府が音をなくしてもう数ヶ月が経つ。そろそろ待ち人には来てもらわなくてはならない。でないと取り返しのつかない事になってしまう。

そんな風に願っていた時だった。鎮守府の外から微かだがボーッとという汽笛の音が聞こえた。

……ようやく来たか。どれだけ人を待たせたと思っっているんだ。だけど……間に合って良かった。

暖炉の前に座る卯月には聞こえていないようだ。好都合だ。

卯月、俺はトイレに行ってくる。しばらく温まっておくんだぞ？

「ぷっぷっぷー」

俺は部屋から出るふりをして卯月の死角に姿を隠す。段々と汽笛の音は近づいてくる。

船は鎮守府に到着したようだ。沢山の足音が迫って来ている。

「ぴょん？」

卯月も異変に気がついたようだ。だが俺の言いつけ通り暖炉の前

を動こうとはしない。

バン!!

ついに部屋の扉が開け放たれた。卯月は目を丸くさせている。

「提督!! 生存者がいました!」

「なんだと!?! 早く保護しろ!」

待ち人達は卯月を見て直ぐさま腕を掴み何処かへ連れて行こうとする。

「お前ら急になんだぴよん! ここはうーちゃん達の鎮守府ぴよん!」

「相当、混乱しているようだな。可哀想にこんなによせ細ってしまつて……」

提督と呼ばれた男の部下達に腕を掴まれ連れて行かれる卯月は弱々しくも抵抗している。

「やめろ! 離せぴよん! しれいかん! 睦月! たすけてえー!」

「落ち着きなさい、もうこの鎮守府に生存者は……」

卯月は大声で俺達に助けを求めろ。ごめんな卯月、俺達は無力でもうお前を助けることはできないんだ。

「なんで……なんで来てくれないぴよん……そうだ!」

首から下げていた玩具のラツパを取り出す。

プツプクプー!!! プツプクプー! プツプクプー!

!!

卯月は何度も何度もラツパを鳴らした。だけどいつもの様に俺や艦娘達が現れることはない。

「なんで……どうして……」

それでも卯月はラツパを鳴らし続ける。

プツプクプー!!! プツプクプー! プツプクプー!

!!

なあ卯月、本当は気づいていたんだろ? それどころか俺達に死んだことを気づかせない様に行動していたじゃないか。

食堂を赤いペンキで塗りたくったのは俺達の血が目立たない様にするためだ。

資料室に鍵をかけたのは俺達の遺体を隠すためだ。

俺達が自分の死に気づけばきつと消えてしまう。そう思ったのだろう。本当に不器用で、だけどどうしようもないくらいに優し過ぎる。

「あっー！」

卯月は強引に引つ張られるうちにラツパを落としてしまう。だがあきらめない、今度は自分の口で鳴き続ける。

「ぶっぶくぶー！！ぶっぶくぶー！！ぶっぶくぶー！！」

段々と卯月の声が遠くなっていく。またこの鎮守府から音が失われていく。

「助けてよー！しれいかん！みんな！」

鳴き声は泣き声へと嗚咽交じりのものになっていく。

「ぶっぶくぶー！！ぶっぶくぶー！！」

卯月、確かに仲間を失ったお前の周囲は寂しく、この鎮守府の様に静かになってしまおうのだろう。

「ぶっぶくぶー！！ぶっぶくぶー！！ぶっぶくぶー！！ぶっぶくぶー！！」

だけど明るく優しいお前の周りには直ぐに人が集まってくる。静かな時間なんてほとんどないさ。

だから

頑張れ！卯月！

ここは音のない鎮守府。かつてイタズラが大好きな少女とその仲間達の笑い声が響いていた場所。

『しれいかんにけいれい』

カシヤンカシヤンと食器のぶつかり合う音が食堂全体から鳴り響く。それはわたしの食器も例外ではなく歩きたびに手に持ったトレーに載るカレーとサラダの食器がぶつかりあつた。

「……うつせーびよん」

食堂の窓際にある長机の隅に座る。ここなら右側は壁だから少しは静かだろう、何て浅はかに考えたから。

本当にこの鎮守府はうるさ過ぎる。いや、違う。わたしが静か過ぎるんだ。ずっとずっとあの静かな……音の無い鎮守府にいたから。

食堂の喧騒に意識を向けてみる。ガヤガヤ、ワーワーと言葉がちやまぜになつており聞き取る事ができない。多分、意識のチャンネルをどこか一箇所に合わせて聞き取ることもできるのだろうけど、そんな事は意味も興味もないのでやらない。さっさと食べてこの部屋から出て行こう。そう思いスプーンを持ったところで隣に誰かが腰掛けた。

「卯月さん、お隣いいですか？」

「勝手にするびよん」

金剛型三番艦 榛名。わたしがこの鎮守府に来てからというもの何かと構ってくるうっとーしい奴。わたしがどれだけ無視をしても無理矢理にチャンネルを合わせ話し掛けてくる、勘弁して。

「卯月さんは今日はカレーなんですね。榛名はカツ丼です、ひと切れ食べますか？」

そう言つてカツをひと切れわたしに差し出してくる。

ほんとうに鬱陶しい、うるさい、うるさい、うるさい。——うるさい！どっかにいけ！——そう怒鳴つてしまいそうになるのをグツと堪える。そんな事をすれば余計に人が集まってきてしまう。

「うーちゃんは潔癖症びよん。人が口をつけたモノ何て食べないびよん」

……うつせーびよん。よくしれいかんの食べかけのトンカツを奪つ

て怒られてた。

「それなら大丈夫です！榛名はまだ口をつけてません！」

「…榛名さん、うーちゃんは前の鎮守府で食事は静かに摂るものだと教わったぴよん」

「…うっそぴよん。わたしはあの鎮守府でしれいかんや皆とワイワイ食事をする時間がなにより好きだった。」

「あ……そうですよ……。ごめんなさい」

しよぼんと俯きカツ丼を食べ始める榛名さん。その表情は垂れた髪の毛に隠されてよく見えない。まあ静かになったから良かった。……良かったはずなのに胸のあたりがざわざわ騒ぎ始めチクチクと刺す様な痛みが走る。

喋っても喋らなくてもわたしの周りをうるさくしていく。本当に面倒な人だ。



ここの提督は本当に意地が悪いと思う。わたしの提案した一人部屋にしてくれというお願いを断るのは分かる、ただの我が儘だから。けどせめて響やら望月やらといった静かな艦娘達と相部屋にしてほしかった。……どうしてよりもよって榛名さんと同部屋なんだ。わたしが榛名さんを嫌っているのは周知の事実だろうに。

「卯月さん、明日の演習は同じ隊ですね。頑張りましょう！」

「演習なんて今更なんの意味があるぴよん……」

原初の深海棲艦が倒され世界から深海棲艦は消えた。ただ、敵がいなくなつたから艦娘も不要という話にはならなかった。いつ又あいつらが現れるか分からない以上一定の戦力は必要らしい。艦娘達は軍に残るか一般人になるかを選択する事になった。今、この鎮守府にいるのは前者を選んだ人達。

わたしもここの司令官に呼び出されどちらかを選ぶ様に言われた。わたしはこの鎮守府に全く未練はないので解体を受け入れるつもりだった。

……だけど解体直前になって怖くなった。このまま解体され艦装を失い一般人になればもう二度としいかん達に会えなくなる気がしたから。逆に駆逐艦 卯月であり続ければいつかまた皆に会える。そんな事を思ってしまったから。

気がつくとその場所にあった。あの音のない鎮守府の門の前に。

わたしは急いで鎮守府の中に入り皆を探した。だけど誰もいない。

そうだ！ラツパだ！

ラツパを吹けばいつも皆が集まって来た。今だつてきつと。

ラツパを取り出す為、首に下げていたストラップを引っ張る。けどドストラップの先についているはずのラツパはどこにもなかった。

どこ？どこ？うーちゃんのラツパはどこ？しいかんにもらった大切なラツパぴよん。

辺りを見渡してもどこにもラツパは落ちていない。これじゃあ皆に会えない。仕方がないので自分の声で皆を呼ぶ。

ぷつぶくぷ！ぷつぶくぷ！ぷつぶくぷ！

しいかん達は現れない。あの時と同じだ。それでも呼び続けると鎮守府の外から声が聞こえた。

——卯月さん！

身体が声のする方に引っ張られる。どんどん身体が鎮守府の外へと連れて行かれる。

いやぴよん！いやぴよん！うーちゃんはここに居たい！ずっとずっと！

だけどわたしを引つ張る力はもの凄く強く、抵抗することは出来なかった。

「おはようございます。卯月さん」

「……おはようぴよん」

やっぱりラッパはどこにもなかった。



「卯月さん！朝食を食べに行きましょう！」

「卯月さん！一緒にお茶しませんか？」

「卯月さん！お風呂に行きましよう！」

「お休みなさい、卯月さん」

どんなに邪険に扱っても榛名さんはわたしに話しかけてきた。わたしは一人が好き、静かなのが好きだと伝えても一向に対応は変わらない。もしかしたら嫌がらせ？そう思い怒りが膨らんだけど榛名さんの純粋な笑顔を見せられ萎んだ。

「卯月さんたまに夜になると姿が見えなくなりますよね。どこへ行ってるのですか？」

「教えないぴよん」

「今日も行くんですか？榛名もご一緒していいですか？」

「ついて来たら絶対に許さないぴよん」



わたしはパーカーを羽織って鎮守府の外にある波止場まで来た。今日はいつもより冷え込んでおりパーカーでは寒さを遮断し切れず少し震えてしまう。一度部屋まで戻ってコートに着替えようか。いや、今日はもうこの場所から動きたくない。

この波止場は私にとって少し特別な場所。

真夜中になるとほぼ全ての音が消え、聞こえるのはわたしの呼吸と波の音だけ。まるであの鎮守府の様な場所。

わたしは波の音を聴きながら体育座りをして目を瞑る。

ただいま、皆。



「卯月さんが首から下げているストラップ、何もついていませんね。元は何か付いていたんですか？」

入渠をすませ服を着ていると急に榛名さんがそんな事を言った。

「……おもちゃのラツパが付いてたぴよん」

「ラツパ？……！」

どうやら思い出したらしい。

そう、お前らが音のない鎮守府に来たあの日。抵抗するわたしを無理矢理この場所に連れてきたあの日に落としてしまったのだ。

「先に部屋に戻るぴよん」

脱衣所から出て扉を閉めるとピシャン！と大きな音があった。どうやら扉を閉める時に力を入れすぎてしまったらしい。

榛名さんは悪くないと分かっている。誰も悪くないと分かっている。だけど、どうしてかわたしの中でぐるんぐると理由の分からない感情が渦巻いていて気持ち悪い。その感情を怒りに変換して何かにつつける以外に身体から追いつ出す方法がなかった。だから榛名さんにあんな態度をとってしまった。

その日榛名さんは部屋に戻ってこなかった。
次の日もその次の日も戻ってこなかった。

3日経ってようやく理解した。とうとうわたしと同じ部屋というのに耐えられなくなったんだ。きつと今頃は他の艦娘達の部屋でワイワイ楽しく過ごしているのだろう。

清々する。ようやく静かで平穏な時間を手に入れたんだ。

ぼふっ

ベッドにダイブして目を瞑る。わたし一人だけの部屋では呼吸の音が聞こえるだけで他に何も聞こえない。波の音がある波止場以上に静かだった。

「……」

おかしい、ちつとも落ち着かない。なぜだろう、この静寂をずっと焦がれていたのに。

トントン

不意に部屋をノックの音が包み込んだ。榛名さんが帰ってきたのかも知れない。わたしはゆっくりとした動きで移動し扉を開けた。

「卯月・榛名が行方不明なんだ、何か知らないか！」

扉を開けた先にいたのは榛名さんではなくこの司令官だった。



真夜中の波止場は変わらず静かで緩やかな波の音が聞こえるだけだった。わたしは波止場の際、海全体が見渡せる場所に膝を抱えて座った。

「寒いぴよん」

息を吐く度に目の前が真っ白になる。せつかく海と星が一望出来る場所に陣取ったというのにこれでは意味がない。仕方がないので耳を澄ませる事にした。

ざざーん ざざーん

聞こえてくるのはやっぱり波とわたしの呼吸の音だけ。だけどこれが良い、これが良い。あの鎮守府と同じだから。段々としれいかんや皆の温かさが蘇ってくる。温かさが少しずつ胸から顔にこみ上げて来て眼から溢れ出た。

ハラハラ

目の前を何かが通過した。眼から溢れ出たモノを拭って目を凝らす。

雪だった。最初に通過した一粒を追いかける様に沢山の雪がゆつくりと舞っていた。

「1年……」

あの鎮守府からこの場所に連れてこられて1年が経った。それが信じられなくて、でも確かに皆と過ごしたあの大切な時間に霞がかかり始めているのを感じた。嫌だよ……嫌だよ……皆の事忘れたくないぴよん。早く迎えに来てぴよん！うーちゃんはここに居るぴよん！

皆にわたしの居場所を伝える為のラツパはもうない。全部……わたしの大切なモノは全部、あの場所に置いてきてしまったのだから。やりきれなくて、辛くて、悲しくてわたしは顔を膝に埋めて泣くことしか出来なかった。

どのくらいの時間顔を埋めていたのか分からない。だけど不意にわたしの横から温かさを感じた。顔を上げると太陽が昇り掛けているのが見えた。そして温かさを感じた左隣には榛名さんがわたしと同じ様に膝を抱えて座っていた。服や髪は海水で濡れ、艀装もところどころ破損したボロボロの格好で。

「今までどこ行ってたぴよん」

「卯月さんこそこんなところで何をしていたんですか？」

「うーちゃんは静かな場所が好きだって知ってるはずぴよん」

「知ってますよ。けど榛名が居ない間あの部屋は卯月さん一人だったはずですよっ！」

「……」

「榛名が帰ってくるのを待っていてくれたんですよね？だからこんな見晴らしのいい場所に」

違う。違う。

「やっぱり卯月さんの提督の言う通りですね。不器用で、だけどどうしようもなく優しい……」

うーちゃんのしれいかん……？何を言っているんだ。

「どうぞ、これを取りに行っていたんです」

榛名さんの手にあるのは見覚えのある黄色い玩具のラツパ。

「どうして……、何で……」

「卯月さんにとつてとても大切な物だからです」

「そうじゃないぴよん！何でうーちゃんの為にそこまで……！そんなにボロボロになって、危ないこととして！きつとここの司令官にだって怒られるぴよん！」

わたしにはここからあの場所までどのくらいの距離があるのか分からない。だけど、深海棲艦がいなくなったとはいえ一人で行ける様な距離では絶対じゃない。

榛名さんはラツパを優しく撫でながら私の方を見た。

「実はあの日……卯月さんをあの場所で発見した後、私は貴方の提督に会っているんです」

「うそ……」

あの時わたしがどんなにラツパを吹いても、泣き叫んでも来てくれなかったしれいかん。なんで……どうして。

「最初は榛名も驚きました、幽霊と会ったのは初めてでしたから。でも私より偉い男の人が必死に涙を堪えながら言うんです『卯月の事をよろしく頼む』って。そんなの断れないですよ」

しれいかん……わたしそんなの頼んでないよ。わたしはしれいかんや皆とずっと、ずっと一緒にいたい、それだけだったのに。

「貴方の提督に頼まれたから優しくしてあげよう、最初はそう思っていただけでした。だけど1年経っても仲間達の事を思っただけ一人涙を流す貴方を見ているうちに本当に優しい子なんだと思うようになりました」

榛名さんはずっとわたしにラツパを押し付ける。

「貴方の提督は言っていました。卯月の笑顔は最高だって。それを見たくてこれを取りに行つたんです」

「……」

ラツパを受け取る。1年ぶりのラツパは相変わらずの重さと手触りで、だけど少し黒ずんでいた。

ねえしれいかん、どうしてあの時うーちゃんの前から消えてしまったの？

うーちゃんは何度も何度も呼んだんだよ？

今このラツパを吹けば来てくれるの？

……分かつてる。しれいかんはもういない。だけど、このラツパを吹けばわたしが望んでいるモノが手に入る。そんな気がする。

「すうすうすう」

大きく、大きく息を吸い込む。まだダメ、まだ足りない。こんなじやあの場所までラツパの音は届かない。

限界まで息を吸い込んだ。さあ行くびよん。

届け

プツプクプ~~~~

あの時と何も変わらないラツパの音。懐かしさに涙が止まらない、だけど私の望んでいるモノは手にはいらない。

皆に会いたい。ただそれだけ。皆に会いたくてひたすらにラツパを吹き続ける。しれいかん！来てよ！迎えにきてよ！うーちゃんはここだよ！

もちろんしれいかんは来てくれない。だけど

頑張れ！卯月！

幻聴だったのかもしれない。だけど確かにその言葉は私に届いていた。

「ねえ……榛名さん」

「なんですか？」

「うーちゃんは……頑張ってるのかな……」

「頑張ってますよ。この1年、たった一人で誰にも頼らず弱音一つ吐きませんでした」

「…」

「ですがそれは貴方の提督が卯月さんに願った努力とは違う。榛名はそう思います」

「……うーちゃんも……そう思う」

きつとしれいかんの頑張れって言うのは今のうーちゃんの頑張りととは違う。

仲間を失って悲しいけどそれを乗り越えて今まで通りのうーちゃんでいろってことだ。

しれいかんはそれがどんなに残酷で悲しいことなのかきつと分かってない。乗り越えるということは皆を過去の存在にするってことなのに。

いい加減にするびよん！って文句の一つも言ってやりたい。けどそれがしれいかんの最後のお願いだから。

「榛名さん……うーちゃん、これから頑張ってみようと思う」

「——ッ！、はい、榛名も応援します！」

しれいかん、これでいいんだよね？うーちゃんが笑ってるほうが嬉しいんだよね？だったらうーちゃんはしれいかんの為に頑張るびよん。

バタバタバタ

もう一度ラツパを吹こうと息を吸い込んでいると沢山の足音が近づいていることに気づいた。

『あー！！！榛名さんずるい！見かけないと思ったら卯月ちゃんと友達になってる！』

『ラツパの音が聴こえたから来てみたら！ずるいです！雪風も卯月さんとお友達になりたいです！』

10名はいるだろうか、沢山の艦娘達が一斉に押し寄せてきた。

「ふふ、卯月さんの提督が皆さんを呼んでくれたみたいですね」

わたしの持つラツパを見ながら笑う榛名さん。

わたしは大きく息を吸い直してラツパを鳴らした。

プツプクプー！

本当に不器用で、けどどうしようもなく優しすぎるしれいかん。

「さあ卯月さん、皆さんとお友達になりましょう」

私に手を差し出して笑顔でそういう榛名さん。

「……うーちゃん」

「え？」

「うーちゃんって呼んで欲しいぴよん」

「っ——！はい！」

ねえしれいかん。うーちゃんは泣き虫だから、また皆の事を思い出して泣いちゃうことが有ると思う。けどその時はまたラツパを吹くぴよん、そうすればきつとまた頑張れるから。

もうしれいかんに心配はかけないぴよん。

じゃあ皆が待ってるからもう行くぴよん……あつ、危ない危ない忘れるところだったぴよん。

足を揃え背筋を伸ばして右手を額に添える。これはしれいかんに教わったぴよん。久しぶりだけどうーちゃんがちゃんとできるか見ててね。

大好きなしいかんと皆にけいれい！ぴよん。

ここはラツパの鳴る鎮守府。イタズラが大好きな少女とその仲間達の笑い声が響く場所。

『やっと会えた』

廊下からコツ、コツ、コツと誰かの足音が聞こえた。足音はゆつくり、だけど確実に近づきやがて消え、ガラガラと扉をスライドさせ足音の主が私の部屋に侵入した。

「朝陽あさひさんおはようございます」

そう言った侵入者が誰なのか分からなかったけれどその真っ白な白衣と帽子を見て看護師さんなのだと理解した。

看護師さんは窓際に移動し窓を全開にした。瞬間、激しくカーテンをはためかせながら3月下旬のまだ少しだけ肌寒い風が私を襲った。私は風から身を守る為に頭から布団を被りダンゴムシのように丸くなる。

「今日は部屋で大人しくしててくださいね。いくら元艦娘の方とはいえ貴方は10年も眠っていたんですから、急に動いては身体がビツクリしてしまいます」

看護師さんはそう言っただけ私のベッドに付属している机に朝食を置き部屋から出て行った。

私はずもずもと布団から顔をだし目の前に置かれたパンを一口だけ齧りお皿に戻した。

あまり食欲がない。

私は立ち上がり、ベッド横の椅子に置いておいたスケッチブックと1本のシャープペンシルを手にもって部屋から抜け出した。

部屋の外には長い廊下が続いており顔色の悪い老人や、ツンと鼻につく薬液の匂いがここは病院なのだと言っていた。私は数秒前まで自分がいた部屋の扉を振り返る。扉には『朝陽あさひ 炎花ほのか』と書かれたプレートが吊るされている。これがこの病室の患者……私の名前だ。

□□□

病室を抜け出した私は真っ直ぐに中庭に向かい木製のベンチに

座った。弱々しい風が吹き中庭を囲うよう植えられた桜の木々をカサカサと揺らしている。

膝の上にスケッチブックを開きシャープペンシルを握って目を瞑った。私の中に残った唯一の記憶えいぞうを呼び覚ます。だけどイメージすればするほど頭の中の記憶は霧えいぞうがかかったように霞み、そして消えた。

「……やっぱりダメね」

スケッチブックの上にシャープペンシルを置き空を見上げた。雲ひとつない青空がどこまでも広がり私の憂鬱な気分を少しだけ晴らしてくれる。

私が目覚めたのは10日前のことだった。起きた瞬間、側にいた看護師さんが大慌てで部屋から出ていき数分後に大勢のお医者さんらしき人たちが押し寄せた。

お医者さんが言うには私は10年間眠っていたらしい。だけど私にはその実感がなかった、なにせ記憶がないのだ。記憶がないから現在と眠りに就く前の違いも分からない。私が何も思い出せない事をお医者さんに伝えるとこう言われた。

『記憶というのはね、頭の中の沢山の引出しにそれぞれ種類ごとに収納されているんだ。だから時々取り出してあげないと引き戸が錆び付いて開かなくなってしまう。だけど大丈夫、直ぐにまた取り出せるようになるさ』

なるほど、と思った。どうやら10年間眠っている間に私の頭の中の引出しは完全に錆び付いてしまったらしく、いくら引っ張ってもビクともしない。

だけど一つだけギシギシと悲鳴を上げながらも少しだけ開く引出しがあった。

その引出しの中には映像が入っていた。

海の見える場所に立つ一本の桜の木。その根元には沢山の人が立っていた。そこにいる人達の顔は見えないがその映像を思い出すとその度に私はとても悲しくなって自然と涙が頬を伝った。

私は頭の中のこの映像を形あるものとしてスケッチブックに残そ

うと思った。この映像を描ききれば全ての記憶を思い出せる、そう根拠もなく思ったから。だけど私の意思では引き戸を開くことは出来なくて、食事やお風呂の時なんか急に開いてその度に悲しい気持ちになった。

きつとこの記憶は私にとつてとても大切な物なんだ。だから何とでも思い出したい。けれどスケッチブックを手にして今日で五日目、未だに紙は真っ白なままだ。

ジャリッ

背後の足音に反射的に振り返る。そこには無精ひげを生やした40手前くらいの男が立っていた。

「よう陽炎、今日も真っ白だな」

「ほっといて」

男は度々ここを訪れ私のことを『陽炎』と呼んだ。多分私が記憶を失う前の知り合いなのだと思う。

だけど私には関係がない。男が言うように彼が会いに来ているのは『陽炎』なんだ。記憶を失った『朝陽』あさひ 『炎花』ほのかでは決してない。

「とりあえず描いて見ろよ。そうすればあとは勝手に筆が動くもんだぜ」

「昨日も言ったでしよ、全く描けないのよ」

「ならこれをやるよ」

そうやって男は私に小さな箱を差し出した。

「クレヨン？」

「そうだ。それで適当に描きなぐってみろ」

「馬鹿にしないでよ、クレヨンなんて子供が使うものじゃない」

「いいから描いてみろって」

男の強引な言葉に私はぶつぶつ文句を言いながらクレヨンの箱を開いた。

「って、なによこれ、一本しか入ってないじゃない」

箱の中に入っていたのはピンク色のクレヨンだけ。他には何も入っていない。

「おう、一日一本だ。毎日ここに一色ずつ、計10本持つてくる」

「なによそれ、意味わかんない」

クレヨンを男の胸に突き返す。けど男はそれよりも強い力で私に押し返した。

「約束する。9日後かならずお前の絵は完成する。だから騙されたと思っただけで描いてくれ」

「……ほんとうに適当に描くだけだから」

「それでいい。けど描く時はちゃんと描こうとしてるものを想って描いてくれ」

「……わかった」

その言葉に男は満足したような表情を見せ私に背を向け歩いて行った。

「あつそうそう、クレヨン持ってくるのは俺とは限らねえから」

「はい!?! えっちよつと!」

私の静止も聞かず男は去って行き直ぐに背中が見えなくなった。

「なんなのよもう……」

だけどもあ、確かに今のままだといつまで経っても絵は完成しそうにない。気分転換にクレヨンで遊ぶのもいいかもしれない。私はそう思いピンク色のクレヨンを箱から取り出した。

2日目

「HEY! カゲロウ!」

次の日現れたのはやはりというべきか男ではなかった。代わりに来たのは20代後半くらいの茶色い髪をした割烹着をきた女性。恐らくどこかの家の主婦だろうと思った。この女性も私のことを陽炎と呼んだ。

「これ頼まれてたものネ」

「どうも」

渡されたのは赤色のクレヨン。私は直ぐにそれを使ってスケッチブックに塗りたいかった。昨日のピンクに重なるように、さらに赤の上にも何度も何度も赤を塗りたいかった。

主婦は日が暮れるまでずっと私のことを見つめていた。

3日目

「……」

「……」

やって来たのはピンク色の髪にスカートにスパッツを穿いた目つきが悪い大学生くらいの女性だった。その年でその格好はどうなのか…。

女性は仏頂面で黙って緑のクレヨンを差し出し私の横に腰掛けた。私も無理に仏頂面と会話しようとせず黙ってスケッチブックにクレヨンを走らせた。

しばらくすると横からガサゴソと紙袋を漁るような音が聞こえた。何かと思いい目をやると仏頂面が私の口に何かを押し込んだ。

「……なによこれ」

物体Xを啜えたまま尋ねる。すると仏頂面は袋の中からもう一つ取り出し私に見せつけた。

「秋刀魚焼きです。今巷で大流行です」

そう言うと仏頂面はその秋刀魚焼きとやらを口に入れ咀嚼した。私もそれに倣って食べてみる。味は普通のたい焼きだ…けど何だかとても優しい味がした。

4日目

次に訪れたのは高校生くらいのビーバーのような女の子だった。ビーバーちゃんは茶色のクレヨンを差し出すとベンチに跨りずつとニコニコと私のことを見つめていた。なにがそんなに嬉しいのだろう。

5日目

今日は朝から雨だった。

雨なら流石に今日は誰も来ないだろうと思いい私は朝からずっと部屋に籠っていた。

夜22時、何故か寝付けない。

窓から外を確認するまでもなくザーザーと部屋に響く雨音で未だ外が豪雨だと分かる。

「いやいや……今日はいないでしょ」

そう自分に言い聞かせてもやっぱりあの場所が気になった。このままでは朝まで寝付けない……そう思い私は傘をさしあの場所に向かった。

「やあ、待ってたよ」

「……なんでいるのよ」

「それが僕の役目だからね」

「私が来なかったらどうしてたの」

「その時はまた明日待っただけさ」

私は傘をボクっ娘に渡し、代わりに黄色のクレヨンを受け取った。

私が濡れたベンチに座るとボクっ娘は私を傘の中に入れた。

ボタボタと傘に雨がぶつかる音を聞きながら私は黄色のクレヨンをスケッチブックに塗りたくった。

6日目

「貴方達は私のなんなの？」

渡された青色のクレヨンを握りながら隣に座る青い袴を着た女性に尋ねる。女性は私に一瞥もくれずどこか遠くを見ながら

「私に分かるわけないでしょう」

そう答えた。

「……」

私は俯きスケッチブックに青を塗りたくった。

ピンクの上に。赤の上に。緑の上に。茶色の上に。黄色の上に。

私はどんな答えを欲していたのだろう。少なくともこの女性の回答は私の欲していたものではない。だから私は今感情のままにクレヨンをスケッチブックにぶつけているんだ。

「……けれど」

女性がもう一度口を開いた。相変わらず私の方へ視線は向けない。

「私にとって貴方はかけがえのない仲間よ」

「……」

その言葉にも私は言葉を返すことができない。だつて分かっているから、その言葉は私ではなく『陽炎』に向けられたものなのだ。

だけど。

だけど酷く心が痛んだ。『陽炎』ではなく『朝陽 炎花』であるはずの心が悲鳴を上げた。

私は眼から溢れ出るものを堪えきれず上を向く。涙で滲む視界の中で桜の木の蕾の色が薄いピンク色に変色しているのが確認できた。

7日目

私が肌色のクレヨンを使う横に髪をポニーテールに纏めた大学生くらいの女性が腰掛けていた。

「じー」

「じー」

鬱陶しい……。

ポニーテールは私が絵を描く様子を瞬きすら忘れてじつと凝視していた。私は気恥ずかしさから一旦クレヨンを置く。

「なに？」

「あつ、ごめん気が散った？ 私絵が大好きでさ、人が描いてるとことかも思わず見つめちゃうんだよね。クレヨンを使った絵なんて滅多に見られないし」

「……なら貴方も描いてみる？」

私は肌色と今まで受け取った6色のクレヨンが入った箱をポニーテールに差し出す。だけど彼女はゆっくりと首を横に振った。

「それはできないかな……少なくとも陽炎がその絵を完成させるまでは誰もそのクレヨンを使っちゃいけない」

そんな訳の分からないことを言っ私にクレヨンを押し返した。

8日目

「どうして貴方達はクレヨンを持つてくるの？」

胸の大きな銀髪の女性からオレンジ色のクレヨンを受け取りながらそう訪ねた。

銀髪は考える素振りもなく微笑み即答する。

「陽炎に会いたいからですよ」

私も会いたい——とは言えなかった。

だけど確かに私は思っていた。

私も会いたい。貴方達に会いたい。どこの誰かもしれないけど会いたい、会いたい。

胸が張り裂けそうなほど日に日にその思いは膨らんでいく。クレヨンを受け取る度に質量を増していく。胸が苦しい。

だけど後2日、後2色。

そうすればこの絵は完成する。そうすれば皆に会える。

そうあの男は言ったんだ。だったら私は大丈夫。この今にも爆発しそうな心を押さえ込むことができる。

けれど未だスケッチブックに描かれているのはただ色をぐちゃぐちゃに混ぜ合わせただけの物。私に残った唯一の記憶とは似ても似つかない。

もしもこの絵が完成しなかったら私はきつと……。

絵の完成は間近だと言うのに私の膝に上に乗るスケッチブックが私の心を酷く不安にさせた。

9日目

「私は貴方達に会いたい」

出会って直ぐに私はそう告げた。薄い黒髪を髪留めで纏めた女性は目を数回パチパチと瞬きさせた後、微笑んだ。

「ウチもや、ウチも陽炎にはよう会いたい」

そう言って差し出された紫のクレヨンを受け取り私は直ぐにスケッチブックに向かった。

私の横に腰掛けた髪留め少女の体温が伝わる。あたたかくて安心

した。きつと陽炎はこのぬくもりも知っているのだろう。けれど私は知らない、それが辛かった、理由も分からないけど耐えられなくて眼からまた涙が溢れた。

でも明日、明日になればこの絵は完成する。

ぐちゃぐちゃで描いた私ですら何がなんだか分からないけれど明日完成する。

そう男が言っていたのだから。

10日目

「よお、久しぶりだな」

10日ぶりに現れた男はヘラヘラと笑いながらそう私に声をかけた。私がこの10日間どんな思いで絵を描いていたと思ってるんだ……と思ったが不思議とそれ以上の苛立ちは湧いてこなかった。きつと彼も私の『会いたい人』だからだろう。

「はやく最後の1本をちょうだい」

「……そうだな」

渡されたのは黒のクレヨン。それを受け取り私は直ぐにベンチに腰掛けクレヨンを走らせた。

スケッチブックに黒を塗る。

ピンク男の上に黒を塗る。

赤主婦の上に黒を塗る。

緑仏頂面の上に黒を塗る。

茶ビーバーちゃん色の上に黒を塗る。

黄色ボクっ娘の上に黒を塗る。

青袴の上に黒を塗る。

肌色ポニーテールの上に黒を塗る。

オレンジ色銀髪の上に黒を塗る。

紫髪留めの上に黒を塗る。

気づけばスケッチブックは端から端まで黒で塗りつぶされていた。もう塗るところがどこにもない。もちろん絵は私の唯一の記憶えいぞうとは似ても似つかない。けれどこれでこの絵は完成。

けれど私は未だに皆と出会えていない。

会いたい、会いたい、けど誰に？分からない、分からない、けど会いたい、皆に会いたい。

嫌だよお……嫌だよお……皆に会いたいよお……

私は認められなくて、認めたくなくて必死に黒の上にさらに黒を重ねた。涙がスケッチブックの上に落ちてそれをクレヨンの油が弾く。

「陽炎……」

私の肩に男の手が置かれた。私はそれを振り払いクレヨンとスケッチブックを男に投げつけた。

「9日後に必ず完成するっていったじゃない！これのどこが絵だって言うのよ!!!」

男は何も言い返さず黙ってスケッチブックを拾い私に差し出す。

「もういらぬいこんなもの！こんなもの何の意味もないじゃない！」

私はスケッチブックを押し返した、けれど男はそれ以上の力でスケッチブックを私に押し付けた。私にピンクのクレヨンを渡した時のように。

「この絵はまだ完成していない」

「見ればわかるわよ！ただ黒いだけ！絵ですらない！」

「そうじゃない」

男は右ズボンのポケットから何かを取り出し私に渡した。

「これで絵を削って見ろ」

渡されたのは油絵なんかで使うような何の変哲もないただのペインティングナイフ。

「……削る？」

「ああ、もう一度騙されたと思って」

「……」

私は何も答えずただ黙ってもう一度ベンチに腰掛けた。

言われたようにナイフで絵を削る。

するとナイフで削られた黒の下から銀色が現れた。さらに力をこめれば肌色が、青色が、黄色が現れる。

「……」

私は夢中で絵を削った。左上から右へゆっくりゆっくり削っていった。

考えない、ただ勝手に腕が動いた。身体がかってに動いてクレヨンを削る量を調節しているようだった。

そうして上半分、削ったところで出てきたのは海を背景に立つ桜の木だった。霧のように曖昧だった私の記憶映像が少しずつ鮮明になっていく。

私はさらに夢中で下半分を削る。

現れたのは桜の木の根元で笑う金剛さん、不知火、雪風。

錆び付いた記憶の引き出しがガタガタと揺れだした。

私はさらに絵を削る。時雨、加賀さん、秋雲が微笑んでいた。

引つ張つてもいない記憶の引き出しが次々に開かれる。

私は一気に残りを削り取った。浜風、黒潮、提督映像が記憶と全く同じ笑顔を浮かべている。

下手くそでぐちゃぐちゃな落書き以下の絵。きっと他の人が見てもこれ何なのか分からないだろう。

だけど私には分かる。桜の木の下で皆が笑っている絵なのだ。

「陽炎」

私の名前を呼ばれ顔を上げる。

いつの間にか満開になっていた桜の木の下で金剛主婦さん、不知火仏頂面、雪風、時雨ボクっ娘、加賀袴さん、秋雲ポニーテール、浜風銀髪、黒潮髪留め、そして司令男が笑っている。

この絵と全く同じ光景が目の前にあった。

私は袖で涙を拭う、だけど拭っても拭っても涙は止まらない。涙で滲んだ視界が春だというのに陽炎が発生しているのではと錯覚させる。前がよく見えず足元がおぼつかない、でも一步、一步皆の方へ歩いて行く。桜の根元にたどり着くと誰かが私の涙を拭ってくれた。鮮明になった視界にはあの皆の笑顔があった。私はその笑顔に負けないくらいの笑顔を皆に返す。

『やっと会えた!』

『私は青空が好き。青空に高く高く昇る白い雲が好き』

司令官あの人は青空が好きだった。最近では忙しきからかあまり時間を作れていないようだけど、彼が新人提督で艦娘が初期艦である私『叢雲』だけだった時期は日が一瞬空を見上げていることも珍しくなかった。

着任したてで時間を持って余していた私は、波止場に座り込む彼の隣に立ち尋ねたことがある。

『いつも空ばかり見てて楽しいの？』

『うーん…、楽しいって言うのとは少し違いますね。心地良いつて言えれば良いんじゃないか』

私の問いに司令官あの人は曖昧な応えを返した。なんのことはない、彼自身も何故自分が空を眺めているのか分かっていないのだ。私が呆れた表情を司令官に向けてと彼は自分の座るコンクリートの横辺りをポンポンつと二回叩いた。

『叢雲さんも座ってみれば分かりますよ』

どうやら私に隣へ座れと言っているらしい。私は彼の言葉には一言も返さずその場に膝を抱えて座った。

座った途端に空が大きくなったような気がした。なぜだろう、立っていた時と視線の位置は1mも変わって居ないというのに。

不思議に思っていると海風が私の髪をなびかせ、海猫カモメの鳴き声が耳を撫でた。目を瞑ると暖かな春の日差しと磯の香りが私を包み込む。クアー、クアーつと一定のリズムで鳴く海猫の声と押しでは引いていく波の音を聴いているとなんだか時間の感覚が狂うような気がした。……悔しいが心地よかった。目、耳、鼻、肌の4つの感覚器官が癒されるようだ。これでおにぎりでもあれば完璧だ。

『どうです？…気持ち良いでしょう？』

隣からの声に瞼を開けるとやわらかな微笑みを浮かべる司令官が私を見つめていた。

『まあまあね』

本当は凄く気持ちよかった。だけど、ここで私が正直に答えれば司令官は今まで以上にここで青空を眺める時間が増える気がした。だから私は捻た応えを返した。

だって青空なんかよりも、もっと私を見てもらいたかったから。

首を45°曲げて青空に視線をやる。空にはもくもくと浮かぶ入道雲がゆっくり、ゆっくりと風に流され移動を続けている。

『叢雲さんは青空、お好きですか？』

雲を眺め、文字通りうわの空だった私は彼のその質問に何と応えたのか覚えていない。

□□□

燃料は尽きた、砲弾も尽きた。艦装はボロボロで一步前に進む体力すら残っていない。残っているのは不発により三連装魚雷発射管の中で燻っている酸素魚雷が一本だけ。

「ユルサナイ ゼツタイユルサナイ」

夜の帳の中でアイツが唸った。暗くて姿は見えないけど唸り声から私との距離は約10mほどだと予測できる。

人類が何十年、何百年と探し続けてた怨敵、『深海棲艦の母』が私の目と鼻の先にいる。私の魚雷が届く場所にいる。——私がこの戦争を終わらせる事ができる。

戦争終結、それは何百年もの間受け継いできた艦娘達の悲願で私が纏う『叢雲』の艦装にもその想いはしっかりと受け継がれていた。

「叢雲おとおお！やれええええ！」

後ろから摩耶さんの叫び声が聞こえるのと同時に、まぶしすぎる程の閃光が私と『始まりの深海棲艦』を照らした。摩耶さんが探照灯で照らしてくれたのだろう。

探照灯により姿を現した始まりの深海棲艦は海面に膝をつき、ダラダラと全身からおびただしいほどの血を流しながら私を睨んでいた。「叢雲…はやく!!」

今度は春雨が叫び、それに続くように他のみんなも私の名を叫ぶ。みんな私以上にボロボロで海面に横たわり顔だけを私の方へ向け吠えるように叫びつづけた。みんな、みんなこの戦争を終わらせる事だけを考えている。

『原初の深海棲艦』。これまで数々の深海棲艦を生み出してきた深海棲艦の母とも呼ぶべき敵。こいつが沈めばもう新たな深海棲艦が生み出されることはなくなる、もちろん、残党はまだまだいるだろうが殲滅にはさして時間を要さないだろう。

私たちの勝利だ。

始まりの深海棲艦はここまでの戦いで轟沈寸前、あとは私のもつこの魚雷を命中させれば間違いないと沈む。それでこの戦争は終わる。

だけど私は魚雷を撃てずにいた。

「叢雲…何やってるんだ！早くとどめを！」

ずっと、ずっと、皆は戦争を終結させることだけを考えていた。私だってそうだった。深海棲艦を倒し、アイツ等のいない静かで平和な海を取り戻したいと考えていた。

だけど、いつからだろう。いつの間にか私は『戦争を終わらせること』ではなく『戦争が終わった後のこと』を考えるようになっていた。それは私達艦娘が優勢になり、敵を追い詰めて行くほどに顕著になった。

戦争が終われば私達はどうなるのだろうか？

私達艦娘は深海棲艦と戦う為に力を与えられ、集められた人間だ。当然、戦うべき敵がいなくなればその力を奪われ私達は元居た場所へ帰ることになるのだろう。

幼い艦娘は両親の元へ、といっても艦娘に志願するような娘には大

抵両親なんていない、そのほとんどが孤児院へ送られることになるのだ。比較的年齢の高い戦艦や空母はそれぞれにあつた職業の斡旋とあったところか。なんにしても私達は散り散りとなりそれぞれの生活を送ることになる。

お別れ
卒業だ。

そんなのはいやだ。私はもつと、もつとこの生活を続けたい。

本当の姉妹じゃなくなつて姉妹艦のみんなと馬鹿なことをして遊びたい。

きつい演習でボロボロになりながらもみんなで笑いながら入渠したい。

しようもないようなことでみんなと喧嘩して、そして仲直りしたい。

みんなでギヤーギヤー騒ぎながら料理を作りたい。

また司令官あの人の隣に座つて一緒に青空を眺めたい。

どれも、どれも終わらせたくない。

「むらくも!!お前が終わらせるんだ!!」

いやだ、いやだ、終わらせたくない。もつともつと私はこの日常を続けたい。

だけど

……分かつてる。こんなのは私の我が儘でしかないって。みんなはそんな覚悟はとづくに決めているんだって。

私は魚雷発射管の中で燻っていた魚雷を掴み引き抜いた。

ちゃんと撃つ、撃つわよ。それが私の役目だつてことくらい分かつてる。

でも、もしも外しちやたらごめんさいね。涙で前、よく見えな
いの。

私は涙でぐちゃぐちゃになった視界の中、始まりの深海棲艦に向かって魚雷を投げつけた

□□□

木々の隙間から太陽の日差しが漏れる中、私と春雨は2人、鎮守府の庭を歩いていった。

隣を歩く春雨はこれから登山にでも行くのかというほど大きなリュックサックを背負っており、その重みの為か歩は遅い。門まで私が持とうかと提案したがすげなく断られてしまった。

「……静かな鎮守府というのはやっぱり変な感じですね」

春雨が前を向いたままそう言った。その横顔はなんだか硬く、何かを堪えているように見える。

「そうね。私が着任したばかりの頃は司令官と私だけだったけど直ぐに貴方や皆が来たものね」

「みんな……行つてしまいました」

この鎮守府には既に私と春雨、そして提督しか残っていない。あれだけいた仲間達はみんな艦娘を卒業していった。

庭を走り回る時津風も、それを追いかける雪風もない。

ランニングをする島風の息遣いも、ぽいぽいはしゃぐ夕立の声も聞こえない。聞こえるのは私と春雨の足音、それに風に揺られる木々の音くらいだ。

春雨の言う通り、みんななくなつてしまった。

今隣を歩く春雨だつてそう、あと数分後にはいなくなつてしまう。

「……春雨は孤児院ではなく働きながら一人暮らしをするのよね」

「はい。郵便屋さんでお世話になることになっています。私がやりたかつたお仕事です」

「そう……貴方にぴったりのお仕事ね」

「へへ、輸送任務はお任せ下さい。なんちゃって」

そう言つて春雨は背の荷物を負い直した。いつもドラム缶を背負つて私達に燃料を届けてくれた彼女が今背負っているのはこの鎮守府から旅立つ為のリュックサックだ。私はそれが堪らなく辛かった。

「さて、お見送りはここまででいいですよ」

急に春雨がぐるりと回り私にそう告げた、いつの間にか鎮守府の門前に到着していたらしい。門の外では一台の車が待機している。春雨を迎えにきたのだ。

「そう……」

言いたいことは沢山あった。だけど涙を堪えるのに必死な私は唇を噛み締め、そうすげなく返すことしかできなかった。春雨はそんな私を見てそつと私の右手を両手で包み込んだ。

「なんて顔しているんですか。叢雲、貴方はあの始まりの深海棲艦を倒した英雄なんですよ？しつかりしてください」

「……」

「そんな顔しないでくださいってば。死に別れる訳ではないんです。会おうと思えばいつでも会えます」

「分かってるわよ……」

「それに住む場所が少し離れるくらいで私達の友情は変わりません。そうでしょう？」

春雨は卑怯だと思った。そんなことを言われてしまえば私はもう何も言えない。笑つて彼女を送り出すしか出来なくなってしまう。

「では叢雲、お別れです」

そう言つて春雨は掴んでいた私の右手をゆつくりと離す。その瞬間に私の右手から春雨の体温が急速に失われていく。まるで今まで積み重ねた春雨と私の関係を示唆している様だった。

春雨も私も涙を流していた。だけど唇を噛み締め泣き声だけは必死でこらえた。声を漏らしてしまうと言つてはいけないことまで

言ってしまいそうだったから。

「今までありがとうございました」

そう言い残し、春雨は迎えの車に乗り込んだ。直ぐに車はエンジンを始動させ発進してしまう。10m、20m、50m、やがて車が見えなくなる頃には私の右手から春雨の体温は完全に感じられなくなっていた。

「行っちゃった……」

私は涙を止めるために首を90°。曲げ空を見上げた。上空では真つ青な空に白い雲が高く、高く立ち昇っている。

「春雨の嘘つき」

春雨は私たちの友情は変わらないと言った。だけどそれは嘘だ。

これから春雨は私の知らない土地で私の知らない新たな仲間達と時を過ごすのだろう。そしてそれは春雨を変えてしまう、次に私が春雨と会う頃には彼女はもう全くの別人となっているはずだ。

話していてもどこか余所余所しさを感ずるだろう。私の知らない誰かの影を彼女に感じてしまうのだろう。それは彼女の目からみた私にしても同じことだ。

きっと春雨もそんなことは理解している。だから最後に涙を流したんだ。

これで、叢雲と春雨はお別れなんだ。

どんなに綺麗で輝く記憶もいずれは錆び付き、風化し、砂となって散ってしまう。もしも本当に錆びつかせたくないのなら磨き続けるしかない。

ずっとずっと傍にいるしかない。

私は右腕で涙を拭き取り大切なあ記の人の元へと足を進めた。憶

□□□

「やっぱりここにいたのね」

探し回るまでもなく司令官は波止場にいた。いつものようにコンクリートの上で胡座をかき空を見上げている。

「叢雲さんですか、何か御用ですか？」

「御用ですか？じやないわよ、どうして春雨の見送に来ないのよ」

「言うべき言葉は退任式そつぎようしきの日に伝えましたから」

司令官は私を一瞥することもなくただ空を見上げ続ける。その手には似合いもしないタバコが握られていた。彼の吐いたタバコの煙は空に向かってモクモクと立ち上る。だが決して雲になることはない。

「隣、いいかしら」

「どうぞ」

私が隣に座ると司令官は啞えていたタバコをコンクリートに押し付け火を消した。やっぱり彼にタバコは似合わない。

「懐かしいわね、昔はよくこうして2人で空を見てた」

「はい、いつからかなくなってましたけどね」

「この艦娘が増えてからよ。忙しくなった貴方は空を見上げる余裕さえなくなった」

「……」

「でも私は時々ここに来ていたのよ？一人でこの空を見てた」

「そうでしたか」

「そうよ」

会話が途切れ言葉がなくなる。代わりに聞こえるのは打ち寄せる波の音と海猫の鳴き声だけ。どんなに耳を澄ましても笑い声も、怒った声も泣き声も聞こえることはない。

あの時と同じだった。

「叢雲さん、そろそろお迎えが門にやってきますよ」

司令官は腕時計で時刻を確認すると私にそう告げた。だけどやっぱりこちらを見ることはない。

「卒業お別れです」

記憶も想いも錆び付き風化する。どれだけ司令官を想う私のこの気持ちが強くなったって時間の流れが想いを思い出へと変えてしまう。

錆びつかせたくないのなら磨き続けるしかない。
ずっとずっと一緒にいるしかない。

だから私は

「行かないわよ、私」

「……何を言っているんですか」

今日初めて司令官が私の方へ顔を向けた。その目には涙が溜まっているように見える。……だけど、私の言葉に笑みをこぼすことはなかった。

「当たり前じゃない、最初から今だって貴方は私がついていないとなんにもできないんだから」

司令官が口を開こうとするのが分かった。私はその言葉を遮るよううまくし立てる。

「どうか貴方の方からお願いしなさいよね！私が断るとでも思ったわけ？」

司令官は開きかけた口を閉じジツと私を見つめた。私の言葉を待っているのだろう。

「なに？私に気を使っていたの？余計なお世話よ！私には家族なんていないんだから！」

「叢雲さん」

あれだけ言いたかった言葉があったはずなのに直ぐになにも言えなくなってしまう。もう司令官の言葉を遮ることはできない。だから私は最後に一番伝えたかった想いを口にした。

「私は……私は貴方とずっとずっと一緒に居たい！お別れしたくない！私を連れて行って！」

思いを口にし私は右手を司令官に突き出した。まるで男女逆のポーズの様だ。

私は顔を伏せ、彼が手をとってくれるのを待った。

少しして私の手を温かさが包み込んだ。直ぐに分かった、これは司令官の手だ。司令官が私の手を取ってくれた。

……でも

「顔を上げてください」

どうしてなの？ どうしてなの？ 私が差し出した手は右手なのにごうして貴方は私の左手を掴んでいるの？

どうして私のカッコカリの指輪を取り外しているの？

「ごめんなさい、叢雲さん。僕は貴方と同じ時間を過ごすことはできません」

「なん……で」

「なんでもです」

「いやよ……いやよ……」

「叢雲さん」

どれだけ私が拒否しても涙を流しても司令官は私の右手を掴んではくれない。ただ無慈悲に別れの言葉を告げる。

「卒業です」

そう言つて司令官は私の薬指から取り外した指輪を青空に向かつて投げた。指輪はまっすぐに空に向かい、やがて海に落ちてしまった。

「なんで……なんでこんなことするのよ……」

「もう一度言います」

「お別れです、叢雲さん」

これ以上司令官の口から別れの言葉を告げられたくなくて私は逃げるように走った。

でもどれだけ走つても、どれだけ逃げてても司令官や皆との思い出が私を追いかけてくる。この鎮守府には皆との思い出が多すぎる。逃げるにはここから出るしかない。

いつの間にか私は荷物も持たずに門の前に来ていた。30分ほど前に春雨と別れたこの場所に。門の外では真っ黒な車が私を待っている。

『お別れです、叢雲さん』

外に出るのを拒んでいるとあの言葉がフラッシュバックした。

仲間はいなくなり、司令官想い人からは別れを告げられてしまった。もう私ががここに残る理由はない。

最後に私は空を見上げる。どこまでも続く青い空に白い雲がプカプカと浮いていた。

「さようなら」

私は空に別れを告げ、門の外へと足を進める。振り返ることはもうしなかった。

私は青空が嫌い。青空に高く、高く昇る白い雲は私がどんなに背伸びをしても届くことはない。それは私が本当に求めていたものは絶対に手に入ることはないのだと再認識させる

だから

私は青空が嫌い。青空に高く高く昇る白い雲が

大嫌いだ。

最後のお客さん

耳が凍って取れてしまうのではないかと思えるような12月も半ばの朝、買い出しを終えた私は車に乗って店いえに向かっていた。

元々クソ親父の愛車だったオレンジ色のハスラーは今では塗装も剥げ、エンジンもブルンブルンと喧しくなり動いているのが不思議なほど年季の入った風貌になっていた。まあ、もともとクソ親父は車のメンテナンスをするようなマメな人ではなかつたので今のハスラーの現状は仕方がないと諦めている。

ただ、エアコン機能まで壊れているのには参った。暖房が効かないせいで車内は真冬の外と変わらない気温になっている。私は真っ白な息を吐きながら買い出しに行かなくてはならない。新しい車に買い換えようと思ったこともあつたがそれは止めた。クソ親父の匂いが残るこの車とは最後まで付き合っていきたいと思つたから。

店いえに到着すると車庫に車を入れ材料を持って店に入った。
開店まであまり時間がない、急いで支度をしないと。

私は厨房に行くときエプロンを着て戸棚から薄力粉・重曹・牛乳・砂糖・塩を取り出し、たい焼きの生地作りを始める。

薄力粉と重曹を混ぜ合わせ泡立てる、そこへ砂糖、塩を加えて混ぜたら最後に牛乳と水を投入。昔、私がここへきたばかりの日にクソ親父から教わった通りに混ぜ合わせる。あの時のあの味を忘れないよう、無くさないようにレシピは一切変えていない。

1時間ほどかけて大量の生地を作り終え時計を確認すると針は午前10時を指していた。

「やばっ！ちよつと遅れたー！」

私は急いで店を出て外のシャッターを上げた。アルミで出来たシャッターが完全にあがりきり『和菓子屋 風鈴』の看板が現れたのを確認すると私は急いで店内へと戻りレジと厨房が一緒になったカウンターに待機する。数分もするとお客さん第一号が入店してきた、高校生くらいの女の子だ。

「いらっしゃい」

「秋刀魚焼き2つください。粒餡とこし餡一つずつ」

「まいどあり！」

クソ親父が亡くなって2年、私はあの人の残したこの店を継ぐことにした。相変わらず客足はまばらで繁盛しているとはいえないけど別に構わない。私はクソ親父と過ごしたこの店を続けたいだけだから。

今日も『和菓子屋 風鈴』は元気に営業中です。

□

とはいえ、やっぱりお客さんが少ないと暇だ。昔はちよつかいをかけてくるクソ親父をあしらうのに夢中で暇を感じるようなことはなかったけど今はそうはいかない。くあくど欠伸をしながら窓から外を眺めるしかなかった。

しばらくするとチリンチリンと鈴の音が店内に響いた。お客さんが店に入ってきた合図だ。

「いらっしやいませー！」

「ぶっぶくぶー」

入店してきたのは小学生高学年か中学生くらい赤い髪の女の子だった。何故か女の子は首から玩具の黄色いラップを下げている。最近の流行なのだろうか？そういうのに疎い私にはよく分からない。

女の子は興味深そうに店内を一周するとレジへ来てパーの形にした右手を私に突き出した。

「秋刀魚焼き50個くださいぴょん！」

「50!?5尾の間違いじゃなくて？」

「50ぴょん！」

「分かりました……でも重たいわよ？持って帰れるの？」

見たところ女の子は手ぶらだ、リュックサックを背負っているわけでもない。その小さな体で50尾ものたい焼きを持って帰れるようにはとても見えなかった。

「だいじょうぶつぴよん！榛名さんもいるから……あつちようど来たつぴよん！」

女の子はそういうとガラス張りの店の外へ向かって手をブンブンと振る。外にいた大人の女性の一人はそれに気がつくと思いを切らしながら店内へ入ってきた。

「うーちゃん！榛名を置いて行かないでください！探したじゃないですか」

「ごめんぴよん」

中学生くらいの女の子に20半ばくらいの女性……どういふ関係なのだろうか？姉妹には見えないしまさか親子つてこともないだろう。

「それで、みなさんへのお供えものどれにするか決まりましたか？」

「うん！このたい焼き（秋刀魚）っていうのにするぴよん！」

「秋刀魚……？へえ、秋刀魚の形をしたたい焼きですか、面白いですね」

「でしょ？それに美味しそう！これなら皆も喜んでくれそうぴよん！」

「ですね、ではこれにしましょう。すみません、このたい焼き（秋刀魚）を50尾いただけますか？」

「はい、ちよつと作るのに時間がかかるのでそのベンチに座って待っていてください。あつ、粒餡、こし餡、カスタードとありますけどどれにしますか？」

「粒とこし半分ずつぴよん！」

「はい、では少々お待ちくださいね」

私は秋刀魚の形をした鉄板に油を塗り火を点ける。鉄板が温まってきたところで尻尾の方から準備していた生地を流し込みあんこを乗せる。

今では慣れたものだけど初めは生地が少なすぎたり多すぎたりで中々上手くいかなくてクソ親父に八つ当たりしたこともあったっけ。懐かしい。

秋刀魚焼きを作っている最中、チラリと女の子を見てみた。女の子はベンチに腰掛け首から下げたラップを大事そうに抱えている。よ

く見るとラッパはかなり年季の入ったものらしくところどころ黄色い塗装が禿げ、黒く変色してしまっていた。初めはネックレスの類かなにかかと思っただがどうやらそうではないらしい、彼女にとって大切な思い出の品なのだろうと予想できた。

「おまちどうさま、秋刀魚焼き50尾です」

「きたびよん！」

30分ほどかけて50尾ものさんま焼きを作り終え女の子に手渡す。会計を済ませると女の子と女性は二人して大量の秋刀魚焼きを抱えて店を出て行った。

□

女の子と女性の次のお客さんは女子大生っぽい女の子だった。女子大生はワンピースタイプの紺色のコートを羽織り、頭には帽子を乗せていた。帽子から外にある真っ白で長い髪がとても印象的な女性だ。

女子大生はうー、寒い寒いと両手をすりあわせながらカウンターまでやって来て注文する。

「秋刀魚焼き一つ、出来立てでね」

「まいどあり、味はどうしますか？」

「カスタードで」

「少々お時間いただきます。ベンチに座ってお待ちください」

秋刀魚焼きを作る間、女子大生の様子を窺ってみた。女子大生はただジッと窓の外に目をやり空を見上げていた。このくらいの歳の女の子なら時間さえあればスマホを弄ってそんなものなのに彼女は何かをするでもなくただ静かに空を見上げていた。

不思議に思い、私も窓から空を見上げて見るが特におかしなことはなかった。ただどこまでも広がる青空に一機の飛行機が空をかき分け飛行機雲を描いているだけだ。

「秋刀魚焼きカスタードおまちどうさま」

そういうと女子大生はハッと気づいたようにこちらに視線を向け

た。気のせいかその目元は少し潤んでいるように見えた。

「ありがとう、これ会計」

「はい、120円ちょうどですね。ありがとうございました」

会計を済ませ女子大生は店の外へでた。何となく気になってガラス張りの窓から彼女の後ろ姿を目線だけで追いかけた。青空の下で揺れる女子大生の真つ白な髪はなんだか空に浮かぶ入道雲のように見えた。

□□□

それからもいつも通りお客さんはまばらで1時間に5〜7人やってくる程度だった。日が落ち時刻を確認すると18時前、そろそろ店を閉めようというところで常連のお客さんがやってきた。

「いらっしやい不知火、遅かったのね。今日はこないのかと思ったわ」「少々立て込んでまして。間に合ったのなら良かったです」

そう言うとな不知火は注文をすることもなく黙ってベンチへと座つた。私は私で鉄板に2尾分の生地を流し込み秋刀魚焼きを作り始める。

彼女はここの唯一の常連客で毎日のようにここで秋刀魚焼きを2尾買っていく。もう詳しくは覚えていないが確か私が店を継いだ頃くらいから来てくれるようになったのだ。

「今日もお見舞い？」

「はい」

「お姉さん、早く目を覚ますと良いわね」

「ええ……陽炎は本当に寝坊助ねぼすけで困ります」

作り終えた秋刀魚焼きを紙袋に入れる、もちろん、お手拭きも忘れないように2人分。

「ありがとうございます」

お礼を言い、本日最後のお客さんは赤く焼けた夕日の中に消えていった。

あつ、間違えた。不知火は最後のお客さんじゃない。もう一人だけ

お客さんが待っているんだった。

どうしようもなく困ったお客さんが。

□□□

不知火が帰った後、私は店のシャッターを下ろし最後のお客さんの為にもう一度鉄板の前に立った。

鉄板に生地を流し込み餡子を乗せ蓋をする。あとは数分待つだけだ。

秋刀魚焼きが出来上がるまでの数分私は少し目を閉じることにした。目を閉じると部屋中に充満した甘い香りが昔の記憶を掘り起こした。

この家^{みせ}に初めて連れて来られた日は驚きの連続だった。まさかあのクソ親父が元和菓子屋さんだったなんて思いもしなかった。けどエプロンをつけたその姿に案外さまになってるなんて思ったのも覚えてる。どら焼きの中に牛タンを入れようとするのを止めたこともあったつけ。

この家でクソ親父は私に色々な料理を作ってくれた。蒟蒻ハンバーグだったりおでんだったり、おうどんだったり。お世辞にも料理が上手だったとは言えないけどそれでも私は嬉しかった。クソ親父が私の為に作ってくれた料理は温かくて、いつも私のお腹も心も満腹にしてくれた。

全部、全部なつかしい。

秋刀魚焼きが焼きあがる頃に目を開けると涙が頬を伝った。いつもこうだ、昔を思い出すと私は泣いてばかり。

鉄板の秋刀魚焼きをお皿に移すと私はそれを持って仏壇のある和室へと向かった。仏壇の中央にはクソ親父がニヤリ笑った写真が飾られている。

私は先ほど作った秋刀魚焼きを仏^{最後の}壇^{お客さん}に供えチンチンと鐘を2回鳴らし手を合わせ目を閉じた。

アンタが死んで私がこの店を継いで2年。初めはアンタとの思い出が詰まったこの家にいるのも辛かった。たい焼きを作ろうものなら悲しさで声を上げて泣いた。けどやっぱりこの家を出て行くな

てことはできなかつたしこの店を閉める何てことも出来なかつた。

だから私頑張ったのよ？心配性のアンタはきつと天国だかどこから私のことをずっと見守ってると思つたから、だからこれ以上心配かけないように頑張つた。

ねえ、アンタから見て今の私はどう見える？そりやあまだアンタのことを思い出してきつきみたい泣いちゃうこともある。それでもなんとか一人でアンタの残した店を切り盛りしてるのよ？

……だめね。やっぱり、涙なんて流してるうちはアンタは私をずっと子供扱いするでしょうね。だからもう涙は流さない。

代わりにこれからはアンタと同じ様にいやらしく笑うことにするわ。

私は目を開け目元に溜まった涙を拭う。そして仏壇に飾つたクソ親父の写真に向かって、ニヤリとあの時と全く同じ笑みを浮かべてやつた。

『輸送作戦はお任せ下さい』

八月の朝、まだ日が昇ったばかりだと云うのに熊蟬がそこかしこで鳴いています。

私は真つ赤な90ccのオートバイに乗りエンジンを唸らせているというのに、その鳴き声はエンジン音をかき消してしまうほどの轟音です。

並木道を走る途中、信号が赤に変わったので一度バイクを停止させ片足を道路につけました。瞬間、私の頭とヘルメットの隙間から数滴の汗が滴り頬を伝います。

「今日も暑いですね…」

こんな日は氷水を張った桶で足首を冷やししながらスイカバーを食べたくありません。まあ、私のことを待っている人がいるのでそんなのんびりとした時間を過ごす訳には行きませんが。

信号が青に変わり私は再びバイクのエンジンを起動しました。バイクは少し控えめなエンジン音を鳴らしながら進みます。信号を少し進んだ所にある小路へと左折すると住宅街へと景色は変貌しました。

「小池さんのお家は確かこの辺り……あつあそこですね」

目的へと到着した私は再びエンジンを停止させバイクを道の隅へと駐車します。すると目の前の家の玄関が勢いよく開き六歳くらいの女の子が飛び出してきました。

「郵便屋さん!!」

「明乃ちゃん、おはようございます」

「おはよう!ね!私のお手紙ある!?!」

「ありますよ、ちよつと待ってくださいね」

私はバイクの後部に積んだボックスを開き中から一通の封筒を取り出し明乃ちゃんへ手渡します。

「はいどうぞ」

「やったー!!」

明乃ちゃんはお手紙を大事そうに抱えると家へと走っていきます。きつと早く中身を読みたいのでしょう。

「あーいけない、忘れてた」

玄関に手をかけた瞬間思い出したように明乃ちゃんが私の方へと振り返りました。何か忘れ物でもあったのでしょうか？

「郵便屋さん！お手紙届けてくれてありがとう！」

そう言う明乃ちゃんは今度こそ家の中へと戻っていきました。

「はい、輸送作戦はお任せ下さい」

私は夏の喧騒に紛れ誰にも聞こえないような小さな声で白露型駆逐艦：春雨の言葉を呟きました。

□□□

配達を終えた私が鎮守府……ではなく舞鶴郵便局へと帰投すると何故だか同僚の皆さんが机を囲み何かを話していました。気になった私は同僚の白井さんに何事かと訪ねます。

「あつ、春ちゃん、ちようどいいところに。ちよつと変わったお客さんが貴方を訪ねて来てるのよ」

「変わったお客さんですか？」

取り敢えず見てみてよと白井さんは自分のいた場所を私に譲ってくれました。はて、変わったお客さんとは誰のことでしょう？心あたりがありません。とりあえず私は白井さんの開けてくれた隙間から件の人物の方へと顔を覗かせました。

妖精さんでした。

錯覚かと思いい目をこすりもう一度机の上で胡座をかく白昼夢へと視線を向けます。けれどまだ居ます。お客さんが切手を貼ったり書物かきものをするために用意された長机の上に確かに妖精さんが座っているのです。しかし普通の妖精さんとは様子が違い、何故かタバコを啜え、ニヤニヤと不敵な笑みを浮かべています。こんなふてぶてしい妖

精さんは見たことがありません。

なぜ、どうしてと私の脳内を疑問が覆い尽くします。どうして妖精さんがこんなところにいるのか。

今から十年前、私達が原初の深海棲艦を倒すのと同時に妖精さんはそのほとんどが私達の前から姿を消しました。僅かに残った妖精さんもその二年後、深海棲艦の残党の殲滅と共に完全にこの世界から消滅してしまったのです。まるで始めからこの世界に存在していなかったかのように忽然といなくなりました。

そのいなくなっただけは妖精さんが何故ここにいるのか。

私が困惑しているとこちらに気づいた妖精さんがよっこらせとおじさんのような掛け声と共に立ち上がり歩み寄ってきます。

「待ってたぜ。お前、『戦争を終わらせた叢雲』の仲間だった春雨だろ？」

『戦争を終わらせた叢雲』。あの日、あの鎮守府で私と別れ、そしてその後消息を絶ったかつての戦友の名です。

「そうですね、貴方は一体……」

「頼みがある」

頼み？妖精さんが私に頼み？そもそもどうしてこの妖精さんは当たり前のように言葉を口に行っているのか、戦時中でも只の一度もそんなことはなかったというのに。

「春雨さん大丈夫かい？」

私の動揺を見て先輩が心配してくれました。

「えっと、大丈夫……なはずです。妖精さんは私達艦娘の仲間ですから。戦時中は何時も助けられました」

私は先輩から妖精さんへと向き直り再度尋ねます。

「頼みとはなんですか」

「……戦争が終わり、お前達が叢雲と別れた後、アイツがどこへ行ったか知っているか？」

「私達の司令官が亡くなるまでは司令官と一緒に生活していたはずですよ。司令官の死後はどこへ行ったのか……それは分かりません。お葬式にも来ませんでしたから……」

あの日、鎮守府の門の前で私と叢雲は別々の道を歩み始めた。でも本当は彼女に言いたかったことがあった。

『私と一緒に郵便屋さんになりませんか?』

どんなに綺麗で強固な友情も放っておけばいずれは錆び付き、風化し、砂となつて散つてしまう。それが嫌なのなら錆びつかないよう手元に置き磨き続けなければならぬ。だから私は叢雲とずっと一緒にいたくてその言葉を口にしようとしていた。

……けれど結局私はその言葉を形にすることはできなかつた。

叢雲にとつて私は一番ではないと分かつていたから。叢雲にとつて磨き続けなくてはならないのは『春雨』との友情ではなく『司令官』との想い出だったから。

だから私は叢雲に別れを告げ一人でこの街にやってきたのだ。

「違うな」

「?何が違うんですか」

「あの戦争の後、叢雲に別れを告げたのはお前達艦娘だけじゃない。あの馬鹿提督も叢雲を拒絶したんだ」

「うそ……」

なんでどうしてそんな事になるのか。叢雲は司令官の最初の艦娘で、一番永い時間を共にし互を信じ合っていたはずなのに。そんな二人のことを思つて私はあの日叢雲にお別れをしたというに。

「嘘じゃねえ。提督アイツに別れを告げられ、涙を流しながら走り去つていくところを俺はこの目で見た」

「なら!なら叢雲は何処に行つたんですか!孤児院出身で居場所を求めて艀装を纏つた彼女には居場所なんてないはずなのに!そんなの……そんなの酷過ぎます……」

涙で視界がぼやけた。拭つても拭つても視界は晴れない。

戦後間もなくして亡くなつた司令官。死因はなんだったのか、それはかつての仲間も誰も知らなかつた。けど、叢雲と一緒にいたのだから、その余生は互に穏やかで満ち足りたものだったのだろうと思つていたのに。

「叢雲を探して欲しい」

「……」

「戦後間もなくして姿を消した叢雲。きつとアイツはあの馬鹿との思い出を守っているんだ。風化し錆び付き、塵となって消えてしまわないよう、新しい記憶に上書きされてしまわないようたった一人で記憶を磨き続けてるんだ」

それはつまりあの日から叢雲は時を止めているということだ。

私はこの郵便局に来て沢山の事を経験した。辛かったり苦しかったり嬉しかったり楽しかったりそれら全ての経験はあの時よりも私をはるかに成長させてくれた。

けど叢雲は司令官に拒絶された時のまま、悲しみの底で時を止め涙を流し続けている。

誰かが、彼女の時を再び動かさなくてはいけない。

「叢雲を見つけて……貴方に彼女を救い上げることができるとですか？」

「……それは分からない。けど俺は叢雲に届けなきゃならない物があるんだ。なあ、お前郵便屋なんだろう？俺を叢雲の元に届けてくれ」

迷う余地はない。泣いている場合でもない。私はもう一度袖で涙と鼻水を拭ってかつて何度も口にした『春雨』の言葉を妖精さんに放つ。

「はい！輸送作戦はお任せください、です！」

私の返事を受けた妖精さんはまたニヤリ、となんだか変わった笑みを浮かべていた。

□□□

肩に妖精さんに乗せ、ヘルメットを被り再びオートバイに乗って海岸沿いの道路を進む。時速30kmで進む私達を夏の空気が優しく撫で、日本海から漂う潮風が鼻腔を撥ぐった。

「それで妖精さんは叢雲がどこにいるのか知っていますか？」

「いや……それが全然分かんねえんだ。俺なりに調べながら探したんだが生憎俺は叢雲の事をよく知らない。困り果ててお前を頼ったっ

てわけだ。もう時間も残ってないしな」

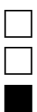
「時間ですか？」

「……口が滑った、忘れてくれ。それで春雨、お前は叢雲がどこにいるのか心当たりはあるか？」

十年前、叢雲や鎮守府の皆と過ごした日々を思い返す。記憶の引出しは思いのほか錆び付いておりなかなか引出しを開けることができない。その事実には私にとってあの日々が、叢雲との絆がどうしようもなく過去の物になっているという事を突きつけてくる。

「叢雲は孤児院の出だったはずです。まずはそこへ向かってみましょう。」

そうやって私はオートバイの速度を上げる。運転に集中し、錆び付き塵になってしまいそうな思い出から目をそらした。



オートバイを一時間ほど走らせ辿りついた孤児院は施設と言うにはあまりに小さく古びた外観。建物というよりはプレハブ、失礼ながらそんな印象を覚える。

「白粉おしろいちゃん、貴方達の言う叢雲ちゃんは一度もここに戻ってきていないわ」

施設の院長である齢六十になるうかと言う女性は叢雲の行方についてそう答えた。唇を尖らせ仏頂面を浮かべ不機嫌を隠そうともせずに言葉を続ける。

「可愛くない子だった。何が気に入らないのかいつもブスツとしていて私がどれだけ世話を焼いても笑みの一つも浮かべやしない。他の子供達にだって同じ、誰にも心を開かないですつと一人で過ごしていたわ。本当に可愛くない子だった」

「そう……ですか」

院長の話に耳を塞ぎたくなかった。一体叢雲はこの場所でどのような幼少期を過ごしたのか。両親も友達もおらず味方なんて一人もないこの場所で一人ぼっち。辛くて、苦しくて、泣き出しそうで、だ

から彼女は『叢雲』の艤装を纏ったのだ。ただこの場所から逃げる為に。

叢雲はこの場所から逃げる為に艦娘になり、艦娘の仲間を得て、英雄となった。そしてあの日、原初の深海棲艦と対峙した叢雲は戦争を終わらせる為に魚雷を投げた。放たれた魚雷は確かに戦争を終わらせたけど同時に司令官や私達との関係性まで終わらせてしまった。終わった先に彼女には何も残らない。叢雲はあの時、何を思いながら魚雷を投げたのだろう。

「お話……ありがとうございました」

これ以上、院長から叢雲の過去を聞きたくなくて背を向けた。けど、そんな私の背中に院長はまだ言葉を続ける。

「可愛くなかった……。だけど……。だからこそ……。心配だった」

口調が変わった院長の言葉に驚き振り返ると彼女は大粒の涙を流しながら泣いていた。そこに先程までの仏頂面はなく、むしろ先程までの表情はこの涙を堪える為に浮かべていたのだと気がついた。

「あの子が此処に来る前、どんな経験をしたのか私は知らない。きつとそれが原因であの娘は心を閉ざしてしまっただんだと思う。だけど、それでも!!そんな子供の心を癒す為に私はこの院を開いたんだ!なのにあの娘の心を開かせる事はできず、あの子は逃げるように此処を出て行った」

枯れることのない涙と共に院長の後悔と叢雲への想いが溢れ出す。叢雲が出てとても長い年月が過ぎているはずなのにその想いには微かな錆付きも感じさせない。

「此処を出てあの子がどうなるか心配だった。戦争が終わって『英雄』なんて持て囃されていると知っても心配だった。だけど……。杞憂だったみたいだね」

院長は涙を拭いそれでも溢れる雫と共に私に微笑みかけた。

「アンタみたいこんな場所までやってきてあの子を探してくれる。そんな友人があの子にできて本当に良かった」

□ ■ □

「叢雲はどうしてあの院に戻らなかったのでしょうか……」

孤児院を後にし、私達は次の目的地へと向かう。先程の海岸沿いとは異なり猿などの野生動物の姿も確認できるような山道を進む。郵便局を出たときはまだ昇ったばかりだった太陽もいつの間にか頭上の頂上で燦々と日光を放っていた。

「さあな。それは俺には分からない。そもそも俺は叢雲のことなんてなんにも知らないからな」

私の肩に乗り襟を必死に掴みながら妖精さんはそう答える。

「ならどうして私達の為に動いて……そもそも貴方は一体何者なんですか？」

「俺が誰かなんてのはどうでも良いことだろう。ただお前が叢雲を助きたいかそうじゃないか、それだけだ。ほら、あれが次の目的地なんじゃないのか？早く行くぞ」

□ ■ □

妖精さんと一緒に叢雲を探し続けた。かつて鎮守府の皆と観光に訪れた舟屋や、星が見えることで有名な丘。数々の思い出の場所を巡った。それはまるで叢雲との思い出を振り返る追憶の旅のようである。私の錆び付いた記憶がだんだんと磨かれて行くのが分かった。

だけど結局、叢雲はどこにもいない。

最後に辿りついたこの場所、私が叢雲と出会った艦娘養成学校の跡地にもその姿はなかった。

「叢雲、見つかりませんでしたね……」

養成学校のグラウンドで膝を抱え、空を見上げながらそう呟いた。先程まではどこまでも青く、どんぶらここと白い雲が流れていた空はいつの間にか赤みがかかり、夜が近い事を私達に知らせている。

「……本当にこれでいいのか？」

「仕方ないじゃないですか。私だって必死に探しました。けどどこにもいない、もう当てだつてありません」

「本当にこれでいいのか？」

「止めてください」

「俺が姿を保てるのは今夜一杯が限界だ。時間がくれば俺は跡形もなく消滅してしまう。そうなれば叢雲はこれから先、ずっと一人ぼっちだ」

きつと妖精さんは本当は私が叢雲の居場所を知っていることも、どうして彼女の元に向かわないのかも分かっている。ただただ、私が臆病な卑怯者だと気づいている。

「怖いんです……叢雲に会うのが。きつと今の私はある頃の春雨ではなくて、叢雲もあの時の叢雲ではないから……」

十年前、私と叢雲の間には強くて、固く、ほつれなんてまるでない確かな友情があった。けどそれは十年前の春雨と叢雲の話だ。十年と云う月日は良くも悪くも私を変えてしまった。今の私達が会えばきつと余所余所しさを感じてしまう、互の知らない誰かの影を感じてしまう。それが不安で、怖くて私は叢雲の元へ向かう事が出来なかった。

「バカ野郎」

膝を抱え俯く私の脛を妖精さんが軽く小突いた。顔を上げると彼はどうしようもなく駄目な娘を見るような目を私に向けていた。

「お前はあの院長の話の何を聞いていたんだ。あの院長はずつとずっと、叢雲の事を想い続けていた。二十年以上経った今もその想いは無くならずああして涙していたんだだろうが。だったら！たかだか十年でお前ら二人の友情が消えてなくなるわけがないだろが！」

「そんなの分かりません!!現に今日、貴方と叢雲を探していて分かりました！私はあれだけ大切に思っていた仲間達との記憶の大部分を忘れてしまつてたんです！きつと今日、貴方と会わなければ一生思い出すこともなく完全に忘れてしまつてました！」

私はまた、頭を膝に押し付けて俯く。

「きつと叢雲と会えば、お互いが昔の友人なのだと気づいてしまします。だったらこのまま綺麗な思い出として忘れ去る方がいいんです……」

「だったら何で泣いてんだ？」

「え？」

「お前に取って叢雲が過去の友人になっているのならどうしてお前はそうやって膝を抱え泣いているんだ？風化してしまった友情だと言うのならそんな風に泣く必要はないはずだ」

「それは……」

「お前といい、お前の司令官といい本当に世話が焼ける……。何で自分の気持ちすらもろくに理解できないくせに、相手の気持ちばかりを考え、暴走してしまうんだ」

「分かったような事を言わないでください！」

「分かるさ。だってお前は、自分の司令官と全く同じ過ちを繰り返そうとしてるんだからな。あの日、それが誤りだと知りながらアイツを止められなかった俺にはお前を止める義務がある」

「私と司令官がいつしょ……？どう言う意味ですか」

「特別だ、お前に見せてやるよ。あの日、あの馬鹿がどうして叢雲を拒絶したのか、その理由をな」

□□□

空を見上げ続けて分かった事がある。それは始めから私、叢雲はこの空が好きではなかったということだ。ただ司令官あの人が青空を好きだったから、私も好きなのだと錯覚した。本当はあの子の隣に座り時間を共有するのが好きなだけで、ただあの子が好きだけだった。

「お久しぶりです、叢雲」

波止場に座り水平線の向こうへと沈む太陽を眺めていると声が聞

こえた。長らく人と会話をしていなかった私はそれが私へと向けられたものだと思えばには認識できず固まってしまふ。そんな私を知つてか知らずか声の主は私の隣へと腰を下ろし同じ様に夕日を眺めた。

「久しぶりね、春雨」

隣に座つたのはかつての友である春雨だった。あの日この鎮守府で別れた春雨はあの時とは比べ物にならないほどに落ち着き、大人び、何より綺麗になつていた。

「……………」

久しぶり、と言だけ言葉を交わすと直ぐに静寂が場を飲み込んだ。きつと誰だつてこんなものだ。子供の頃、どれだけの仲の良かった友人だつて大人になつて再会すればどこか余所余所しさを感じてしまふ。子供の時のような関係には戻れずそのまま別れ二度と会うことはない。

絆なんてそんなものなのだ。

「司令官は亡くなりましたよ」

春雨のその言葉を私の心はずつしりと重く、だけど何の抵抗もなく受け入れた。悲しみよりも救われたような気持ちになつた。

「そっか……。死んじゃつてたんだ。なら、もうここで待ち続ける意味もないのね」

ずっとずっと待つていた。あの日、あれだけこつぴどく振られ、拒絶されたというのに私はそれでもいつかここで待つていれば司令官あの人は私を迎えに来てくれる、その時はパンチの一発でもお見舞いして許してあげよう、なんて考えていた。

でも結局あの人を迎えにくることはなかった。

「どこへ行くのですか」

立ち上がり去ろうとすると春雨がそう言った。もう放つて置いて欲しい、今はとにかく一人になりたかつた。

「別に。ただもう此処にいる意味はなくなつたから。また縁があつたら会いましょ」

今度こそ立ち去ろうとするが春雨は私の服を掴み離さない。一体何がしたいのか。

「叢雲、私と一緒に来ませんか？」

「……ありがとう、でもごめんなさい」

「またそうやって逃げるんですか」

「……、またつてどういふことよ」

「そのままの意味です。あの日、司令官に拒絶された貴方は逃げ出すべきじゃなかった。どれだけ拒まれてもあの人の手を離さなければきっと貴方は真実に辿りついて今とは違う、後悔のない今にたどりついていた……！」

「勝手な事を言わないで!!!」

私の服を掴む春雨の手を力づくで振り払おうとした。だけどどんなに強くその手を振ろうが叩こうが春雨は手を離さない。司令官の手を離してしまった私が間違いだったとその意思でもって思い知らせてくる。

「あの日の事を誰から聞いたか知らないけど、いい加減な事を言わないで！私はただ拒絶されたの！そこには理由も釈明も何もない！」

「あるんだよ」

春雨の肩から彼女のものではない低い声が聞こえた。何か春雨の肩に乗っている。目を凝らすとつくの昔に私達の前から姿を消したはずの妖精さんがそこにはいた。

「ようせい……さん？なんでここに……」

「そんなことはどうだっていい。ただ俺はアイツから預かった記憶をお前に届けに来ただけだ。この春雨の力を借りてな」

妖精さんは手の平を私に向けて差し出す。その手の上にはまるで青空のように澄んだ青の丸い球体が乗せられていた。

「これはアイツの記憶だ」

「きお……くく？」

「そうだ。十年前のこの場所であの馬鹿は確かにお前を拒絶し二人は袂を分かった。きっとお前はアイツに捨てられたのだと思っただろう。だが違う。あの馬鹿は最後の最後までお前の幸せを願っていた。ただアイツはどうしようもなく不器用で甲斐性がなくて、人の心が分からなくて……だけど呆れる程に優し過ぎただけなんだ」

「あの日、アイツが何を思ってお前を拒絶したのか、その真実を見せてやる」

その言葉と共に、妖精さんの手の上の球体が弾け飛び私達を『青』が包み込んだ

□□□□□□

「お別れです」

数秒前まで叢雲さんの薬指で輝いていた指輪を私は思い切り空高く放り投げる。指輪はぐんぐんと青空に向かっていき、やがて雲に届くことなく失速し海へと落ちた。

「なんで……なんでこんなことするのよ……」

その問いに私は答えない。ただ淡々と司令官である私と駆逐艦・叢雲の関係の終わりを、さよならを告げる。

「お別れです」

その言葉がトドメとなって叢雲さんは私に背を向けて走り去っていく。

ああ、良かった。きちんとお別れすることができた……。これでもう彼女が私に縛られることもない。

「本当にこれで良かったのか？」

叢雲さんを見送る私の背に誰かが声を放った。振り返らずとも誰かは分かる。私と同じ『提督』で同期の男だ。

「こうするしかなかったんです」

背を向けたままそう返すと彼が歯を噛み締める音が聞こえた気がした。昔からぶつきらぼうでがさつな男を演じていたが彼が誰より優しく、美しい心の持ち主だという事を私は知っている。

「あとどれくらい残っているんだ？」

「一年……いや、それすらも怪しいですね」

提督。そう呼ばれる私達の間には暗黙のルールがあった。それは

妖精さんに関しての秘密を決して艦娘達に知られてはならないということ。

妖精さんは提督の命を代償に召喚されている。そんな事実を心優しい彼女達が知ればどうなるかは想像に難くない。暁の水平線に勝利を刻み、世界が平和になった後も、その事實は艦娘達の心に傷跡として残り続けてしまう。

だから提督達はその真実から目をそらし、口を閉ざし、そして私は叢雲さんを拒絶した。

僅かばかりに残されたこの命に彼女を付き合わせる訳にはいかな

い。「貴方は共に歩むことを選択したそうですね」

「ああ……。間違っていると思うか？」

「いいえ。貴方は私とは違う。きっと残された時間で沢山の物をその娘に送ってあげられると思います」

その言葉は本心から出たものだった。彼は私とは違い、要領がよく、人の心を解している。その関係が一時のものだったとしても、やがて訪れる別れの悲しみ以上にその優しさを伝えられるでしょう。

「お前は何も分かっちゃいない！」

背を向け続ける私の正面に男が周り込みそう怒鳴った。いつもニヤニヤと浮かべていた不敵な笑みはそこにはなく、ただどうしようもない歯がゆさだけをその顔に残している。

「お前は自分の死が叢雲を深く傷つけるのが怖くてアイツを拒絶した。気持ちちは分かる！ 痛え

くらいに分かる!!でもよ!!!走り去っていく叢雲の顔をお前も見ただろ!？」

数分前の叢雲さんの表情がフラッシュバックする。彼の言うとおりだ、私は彼女に泣いてほしくなくて、傷ついて欲しくなく拒絶した。これでは本末転倒だ。けれどここでそれを認める訳にはいかない、もう……。後戻りはできないのだから。

「今ここで拒絶するか、私の死に叢雲さんを付き合わせるか。どちらが彼女を傷つけないか選択したままです」

「確かにお前が死ねば叢雲は悲しみ傷つくだろう……けどな！死ぬまでの間に少しでも時間があれば何かを残してやれんだろが……ここで拒絶したら……残るのは悲しみと傷だけじゃねえか……」

「その傷は致命傷たりえません。致命傷でなければ時間がその傷を錆びつかせてくれます」

「お前の言う通り時間は心の傷すらも錆びつかせその痛みを和らげてくれるかもしれない。でもな、傷は消えるわけじゃないんだよ。いつまでも叢雲の中に残り続け、アイツが自覚しないまま人生を狂わせる」

「……うるさく」

私は襟を掴む男の手を払い彼を睨みつける。

「そこまで言うのならこれを貴方に託します」

心臓に手を当て鼓動を鈍らす。命を削り未来を消して、代わりに産み落としたのは青空と同じ色をした球体きおくだった。

「それは……？」

『これは私の記憶です。もしも……もしも貴方の言う通り、私の選択が間違っていて叢雲さんの人生に狂いが生じたのなら彼女に渡してください』

「……」

それ以上、男は何も言わなかった。ただ、無言で私から球体を受け取り逃げるようにして背を向けた。

夕空に紛れてゆく男の背中を見つめ続けた。男の姿が完全に見えなくなったとき抑えていた涙が決壊しボロボロと溢れ出した。

涙で青に染められた視界には、夕空であるはずの上空が昔叢雲さんと肩を並べて見上げた青空へと姿を変えていた。

あの男の言う通り私は間違っていたのでしょうか？

それはこれから死にゆく私には永遠に解けない謎だった。

□□□□□□

「間違ってるに決まってるでしょ……!!」

司令官あの人の記憶を見て怒りよりも、悲しみよりも、悔しさに涙と言葉を吐いた。

「なによ、妖精さんの正体は提督達の命の代償って……!!そんなの聞いてないわよ……知ってたら……!!知ってたら私は!!!」

「戦わなかった……か?」

春雨の手に乗る妖精がそう言った。

「お前達は優しいからな……。事実を知れば俺達の命を使うことを拒み、艦娘を辞める奴らだってでただろう。そうなることを恐れて俺達は事実を隠したんだ」

「でも…それでも……!」

それ以上言葉は出なかった。全部、全部さつき見た真実と共に司令官あの人が何を思っただけ私を拒絶したのか知ってしまったから。

あの馬鹿で甲斐性がなくて優しいだけの男は最後まで私の幸せを願っていた。

「今更こんなの見せられてどうしろってのよ……。もう私には何も残っていないのに!こんなの見せられちゃもうここで膝を抱えて拗ねることだってできない!」

「何も残ってない?涙で視界が濁ってるなら擦って向き合え。俺を、アイツの記憶をここまで届けてくれたのはお前の友で、紛れもなくお前に残されたもんだろが」

そう言っただけ歩み寄ってきた妖精さんが私の涙を拭ってくれた。彼の言う通り、鮮明となった私の視線の先にいたのは春雨だった。

「叢雲、貴方にならずと、ずっと言いたかったことがあります」

春雨は私に手を差し出した。その姿はまるで十年前、司令官に手を差し出さただけ拒まれた私の姿そのものだった。

「叢雲、私と一緒に郵便屋さんになりませんか?」

その言葉にまた視界が濁った。もう私には何も残っていないと

思っていたのに、大事なものは全部錆び付き風化してしまっただけだと思っていたのに。春雨はこの言葉を十年前の別れからずっと大切に、錆びつかないように磨いてくれていた。

司令官あの人の想いも知らず、捨てられたと思い、ずっとこの場所で空を見上げていた私なんかの為に。

苦しくて、申し訳なくて、だけどやっぱり嬉しくて、私は春雨に抱きついてこれから先の人生、一生分の涙を流した。

□□□

「どこへ行くんですか」

抱き合う私達に踵を返し、去ろうとする妖精さんを春雨が引き止めた。

「消えるまでもう少しだけ時間がある。それまでのんびり俺達が守ったこの世界でも散歩しようと思ってるな」

「……本当にそれで良いのですか？」

春雨が放ったその言葉は先程の記憶の中で司令官あの人が男に言われたものと同じだった。

「何が言いたい」

春雨は抱きつく私の頭を優しく撫で、「少しだけ、残業があります。待っていてください」そう言って妖精さんに向かい合った。

「貴方も私達の司令官と同じということですよ」

妖精は提督が命を代償とし産み落とされる存在。それが本当なら目の前の妖精さんもその例には漏れない。

私も春雨も気づいていた。目の前の妖精の正体はあの記憶の中で司令官あの人を糾弾していた男に間違いないということ。

「記憶の中で司令官は言っていました。『貴方は共に歩むことを選択したそうですね』と。妖精さん、貴方にもその残された時間で会わなければならぬ人がいるのではないですか？幸い、貴方の目の前にい

るのは人の気持ちをお届ける事を生業とする郵便屋です。依頼さえ貰えれば必ず送り届けます」

春雨の言葉に妖精さんは唇を噛み締めた。何か葛藤があるのが見て取れる。だけど、直ぐに噛み締めた口を緩め、春雨へと届け物を託す。

「二人……一人だけどうしても会いたい奴がいるんだ。口が悪くて生意気で……どうしようもなく素直じゃない奴だ。けど……俺の事をクソ親父って呼んでくれたんだ。俺は……消える前にもう一度だけアイツに会いたい！どうしてもアイツに会いたんだっ!!頼む、俺をアイツの許まで送り届けてくれ!!」

その言葉を受け、春雨は妖精さんを肩に運びオートバイに飛び乗った。そして昔、何度も、何度も聞いたあの頼もしい言葉を口にする。

『はい！輸送作戦はお任せ下さい、です!!』